

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 14 集

1989

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 14 集

1989

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では、宅地開発や道路建設があいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査が増加しています。

本書は、宇治市教育委員会が昭和63年度に行いました開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査や立会調査の概要をまとめたものです。

昭和63年度において、開発事業の事前調査として実施した発掘調査は9件であり、三室戸寺子院跡や小倉環濠集落遺跡において、中世の遺構・遺物を多数発見しております。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つことを願うものです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発事業者の方々を始め、調査期間中にご協力・ご指導賜りました各位に対して心よりお礼申しあげます。

平成元年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

- 1、本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第14集である。
- 2、本書が収録する調査は、昭和63年度に本市教育委員会が開発事業に伴い実施した発掘調査及び立会調査である。
- 3、本書が収録する発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会 教育長		岩本昭造
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事		杉本宏
	同	嘱託	猿向敏一
調査事務局	宇治市教育委員会 参事		頼成綾子
	同	社会教育課 課長	小山豊嗣
	同	文化係長	吉水利明
	同	主任	小西弘子
	同	主事	梅田正人
調査指導	京都府教育委員会文化財保護課、京都府立山城郷土資料館		
調査補助員	八瀬正雄・上元庸・内田貴則・竹村充・志村みどり・山岡万里子 堀美津代・岡本眞由美・大前朋恵・梅田恵子(順不同)		

- 4、本書の執筆は、Ⅰを猿向敏一が、Ⅱを杉本宏が分担した。
- 5、本書の編集は、社会教育課が行い、実務を猿向敏一が担当し、杉本宏が補佐した。

収録発掘調査一覧表

遺跡名称	調査地	調査原因	経費負担	調査期間	調査面積
1. 尖山古墳等	広野町尖山4-70他	宅地開発	住友商事株式会社	昭63.6~8	500㎡
2. 三室戸寺子院跡	菟道奥ノ池20他	宅地開発	大同建設株式会社	昭63.8~9	240㎡
3. 小倉環濠集落跡	小倉町久保3他	店舗建築	㈱晃商	平元 3	150㎡
4. 伊勢田塚古墳隣接地	広野町桐生谷90-1	集合住宅建築	岩井徳次郎	昭63.7	50㎡
5. 善法古墓	宇治善法122-71他	市道建設	宇治市	昭63.8	80㎡
6. 赤塚遺跡	木幡畑山田28他	宅地開発	㈱ビーバーハウス	昭63.8	100㎡
7. 金草原遺跡	木幡金草原11	宅地開発	明和開発株式会社	昭63.9	50㎡
8. 金草原遺跡	木幡金草原14	資材倉庫建築	嵯峨野住宅株式会社	昭63.9	50㎡
9. 寺界道遺跡	五ヶ庄野添42	宅地開発	曾谷昭夫	昭63.9	75㎡



昭和63年度における埋蔵文化財調査の動向

昭和63年度における宇治市内の埋蔵文化財調査は、発掘調査が10件、立会調査が12件であり、いずれも宇治市教育委員会が調査主体となって調査を実施した。

発掘調査のうち、開発に伴う事前調査として実施したものは9件であり、開発事業者の依頼により本市の受託事業として行った。他の1件は、国・府より補助金の交付を受けて、重要遺跡の範囲確認を行ったものである。また、立会調査は、遺跡地の現状変更が軽微な場合において、工事時に職員が立会をし、工事による影響を調査したものである。

昭和63年度は、小規模な宅地開発があいつぎ、昨年度と比べると調査件数が倍増し、6月から9月にかけて調査が集中した。

（開発に伴う発掘調査）

尖山古墳等の調査は、大型の宅地開発に伴い、その計画地内に古墳状隆起と土器出土伝承地が存在したため試掘調査を実施したものであるが、明確な遺構は検出できなかった。

三室戸寺子院跡は、三室戸寺にかつて存在した子院群推定地内での宅地開発に伴い調査を実施したもので、平安後期から室町時代にかけての遺構・遺物を検出した。

小倉環濠集落跡は、中世の防御集落跡であり、かつ弥生集落も重複する複合遺跡である。店舗建築に伴い調査した結果、中世から近世の遺構・遺物とともに弥生後期から古墳前期の土器が出土した。

伊勢田塚古墳は、土師質陶棺が出土した後期古墳であり、その南接部で集合住宅建築に伴い調査を行なったが、明確な遺構は検出できなかった。

善法古墓は、かつて和鏡や輸入磁器が出土しており、市道新設に伴い調査を実施したが、近世銅貨が発見されたのみで、他の遺物・遺構は発見できなかった。

赤塚遺跡は内容不明の遺物散布地で、宅地開発に伴い試掘調査を実施した結果、中～近世と思われる礎石数個を発見した。

金草原遺跡は、藤原道長建立の浄妙寺跡西側に広がる遺物散布地であり、宅地開発に伴い2地点を調査した結果、旧河道と柱穴数個を発見した。

寺界道遺跡は、縄文晩期から平安時代に至る集落跡であり、宅地開発に伴い調査した結果、柱穴等を検出した。

（開発に伴う立会調査）

開発に伴う立会調査は12件実施した。いずれも小規模な開発であるため、目立った遺構・遺物の発見はなかった。

(国庫等補助金による調査)

二子塚古墳の発掘調査と墳丘及び周辺地形の測量調査を行った。発掘調査では、過去に破壊された後円部石室の基礎部分の範囲を確認し、後期の大型前方後円墳の主体部構築方法を窺う上で重要な知見をえた。また、本墳の墳丘及び周辺地形測量図の完成は、今後の調査の基礎資料として有効なものである。

本書が収録する調査は、上記の内、開発に伴う発掘調査及び立会調査であり、国庫等補助金による調査については、下記文献に別に収録した。

二子塚古墳

『五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概報』、宇治市教育委員会、平成元年3月。

本文目次

I. 昭和63年度発掘調査

1. 尖山古墳等発掘調査概要	2
2. 三室戸寺子院跡発掘調査概要	9
3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要	27
4. 伊勢田塚古墳南辺部発掘調査概要	40
5. 善法古墓発掘調査概要	42
6. 赤塚遺跡発掘調査概要	44
7. 金草原遺跡(11番地)発掘調査概要	46
8. 金草原遺跡(14番地)発掘調査概要	48
9. 寺界道遺跡(野添42番地)発掘調査概要	49

II. 昭和63年度立会調査

昭和63年度立会調査概要	52
--------------	----

挿 図 目 次

第1図 昭和63年度発掘調査地位位置図	iii
(1. 尖山古墳等)	
第2図 トレンチ配置図	3
第3図 北部トレンチ実測図	5
第4図 南部トレンチ実測図及び断面模式図	6
第5図 5トレンチ土層断面実測図	7
(2. 三室戸寺子院跡)	
第6図 調査地位位置図(1:7500)	9
第7図 三室戸寺一山絵図(天保15年『三室戸寺藏文書』)	10
第8図 トレンチ配置図	12
第9図 遺構実測図	13
第10図 トレンチ土層断面実測図	14
第11図 SX01及びSK03遺物出土状況実測図	15
第12図 SE27実測図	17

第13図	土器実測図 (1).....	19
第14図	土器実測図 (2).....	21
第15図	土器実測図 (3).....	22
第16図	SE27出土木製品実測図	23
第17図	石製品・土製品実測図.....	24
(3. 小倉環濠集落跡)		
第18図	調査地位置図(1 : 5000).....	27
第19図	トレンチ配置図.....	29
第20図	1 トレンチ実測図.....	30
第21図	2 トレンチ実測図.....	31
第22図	土器実測図 (1).....	33
第23図	土器実測図 (2).....	35
第24図	土器実測図 (3).....	36
第25図	近世初頭における巨椋池と主要幹線道路.....	37
(4. 伊勢田塚古墳)		
第26図	調査地位置図(1 : 5000).....	40
第27図	土層断面実測図.....	41
(5. 善法古墓)		
第28図	調査地位置図(1 : 7500).....	42
第29図	トレンチ配置図.....	43
(6. 赤塚遺跡)		
第30図	調査地位置図(1 : 5000).....	44
第31図	第2 トレンチ柱跡実測図.....	45
(7. 金草原遺跡)		
第32図	調査地位置と周辺遺跡(1 : 7500).....	46
第33図	トレンチ配置図.....	47
(8. 金草原遺跡)		
第34図	土層略図.....	48
(9. 寺界道遺跡)		
第35図	調査地位置図.....	49
第36図	トレンチ配置図.....	50
第37図	昭和63年度立会調査地位置図(1 : 50000)	53

図 版 目 次

- (1. 尖山古墳等)
- 図版第 1 (1) 調査地遠景
(2) 調査地近景
- 図版第 2 (1) 1 トレンチ調査前状況
(2) 1 トレンチ完掘状況
- 図版第 3 (1) 2 トレンチ完掘状況
(2) 2 トレンチ SK07 完掘状況
- 図版第 4 (1) 4 トレンチ調査前状況
(2) 4 トレンチ完掘状況
- 図版第 5 (1) 5 トレンチ調査前状況
(2) 5 トレンチ完掘状況
- (2. 三室戸寺子院跡)
- 図版第 6 (1) 調査地全景
(2) 三室戸本堂と阿弥陀堂
- 図版第 7 (1) 1 トレンチ遺構検出状況
(2) 1 トレンチ完掘状況
- 図版第 8 (1) 1 トレンチ SX11 検出状況
(2) 1 トレンチ SX01・SK03
検出状況
- 図版第 9 (1) 2 トレンチ遺構完掘状況
(2) 2 トレンチ SE27 完掘状況
- 図版第10 (1) SX01・SK03 出土の土器
(2) SE27 出土の土器
- 図版第11 (1) 遺物包含層出土の土器・
石製品
(2) 遺物包含層出土の輸入
陶磁器
- 図版第12 (1) SE27 出土の木製品(1)
(2) SE27 出土の木製品(2)
- (3. 小倉環濠集落跡)
- 図版第13 (1) 調査地全景
(2) 作業風景
- 図版第14 (1) 1 トレンチ遺構検出状況
(2) 1 トレンチ遺構完掘状況
- 図版第15 (1) SD03 土器出土状況
(2) SK13 完掘状況
- 図版第16 (1) 2 トレンチ遺構検出状況
(2) 2 トレンチ遺構完掘状況
- 図版第17 (1) SD03 出土の土器
(2) SX30 出土の土器

I. 昭和63年度発掘調査

I. 昭和63年度発掘調査

1. 尖山古墳等発掘調査概要

(1) はじめに

本調査は、広野町尖山4-70番地他において、住友商事株式会社が計画した大型宅地開発に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査である。

当該計画地は、折居国有林西側の丘陵上であり、計画面積は約128,000m²である。計画地の北半部は過去に削平が行われており、南半部のみ自然地形が遺存している。

この辺は、名木川の最上流にあたり、木津川流域の平野からは1.5km程東へ奥まった丘陵上であるが、前期古墳の一本松古墳や古墳時代集落の八軒屋谷遺跡などが存在しており、また、当該計画地内にも古墳状隆起(尖山古墳)や土器の出土が伝えられていた。尖山古墳については、調査前の踏査において位置確認ができなかったため、地形が残る計画地南半部の尾根上を中心に試掘調査を実施することとなった。調査結果については後述するとおり、古墳の徴候が確認できなかったため、調査記録を作成し調査を終了することとした。

調査期間は昭和63年6月13日から8月4日までであり調査面積は約500m²である。調査にあたっては住友商事株式会社の全面的な協力を受けた。

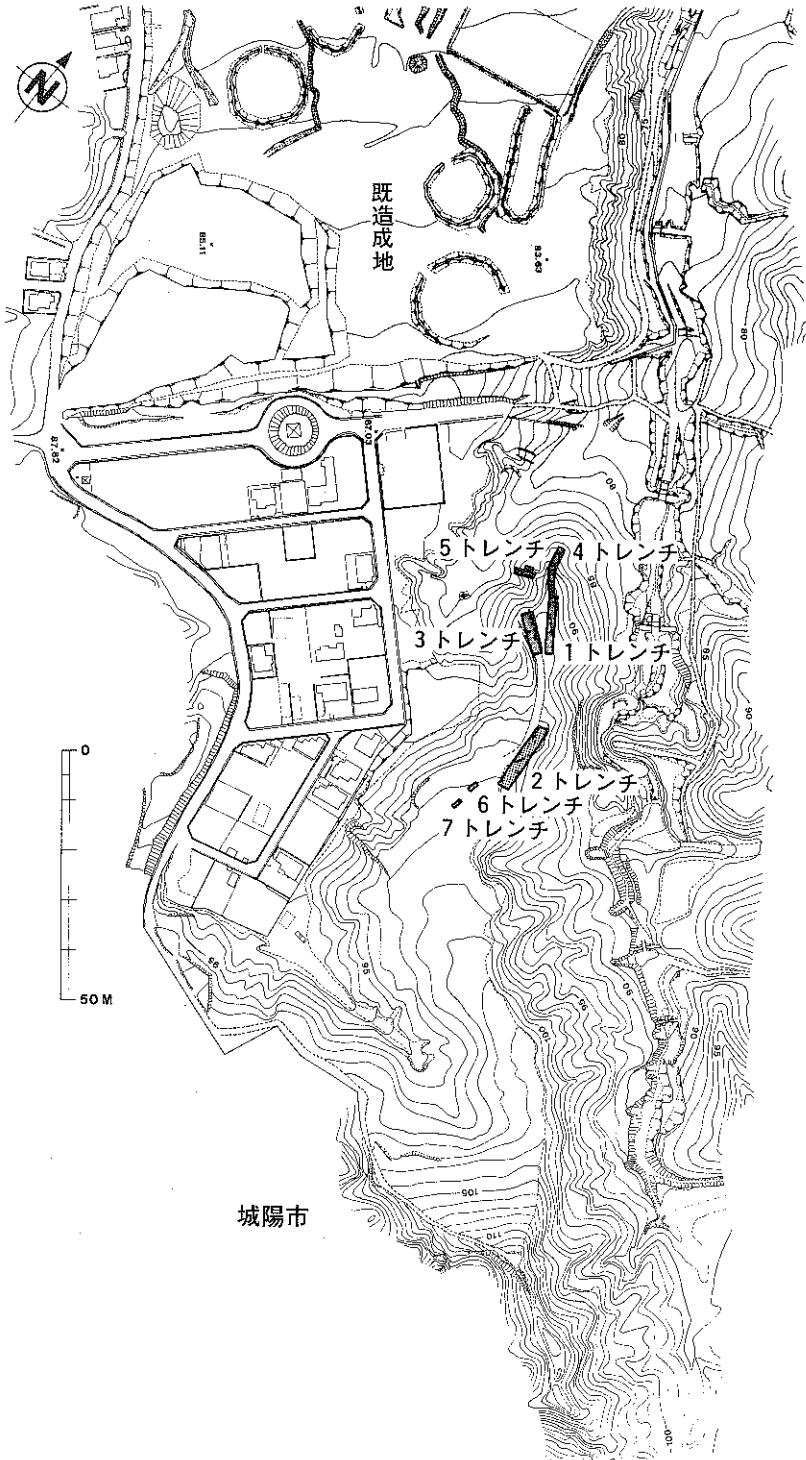
(2) 調査の概要

今回の調査は、尖山古墳等の遺跡の位置・範囲が未確認であることから、事前に開発対象地全域の踏査を行った。その結果、著しいコンターラインの乱れが認められる開発対象地の南側の尾根上は、幅30m程にわたって平坦化しており、過去において既に人為的削平が行なわれていることが理解できた。このため、古墳存在の可能性は低いと推察できる南側は避け、調査は開発対象地の北側を中心に実施することとした。

調査にあたっては、調査対象地の地形状況に合わせ、1～7のトレンチを設定した。各トレンチは、概ね丘陵頂部先端部と丘陵頂部平坦部とに分けられる。

ここでは、丘陵頂部先端部の一群の1・3・4・5トレンチを北部トレンチ、丘陵頂部平坦部の一群の2・6・7トレンチを南部トレンチと分けその概要を述べることにしたい。

北部トレンチ 丘陵頂部先端部及びその斜面部に設定したトレンチ群。標高は概ね86～93m程である。掘削にあたっては、事前の土層確認により現地表下0.3m程で赤褐色粘質土の地山層が存在することが認められたため、パワーショベルを使用して地山層上の表土層の腐植土及び黄褐色土・黄灰色粘質土を除去し、その後、人力による掘削を行った。調査地に認め



第2図 トレンチ配置図

I. 昭和63年度発掘調査

られる基本的層序は、上層から、表土層の暗褐色の腐植土、黄褐色土、黄灰色粘質土、そして地山層の赤褐色系土層である。ただし、4トレンチ・5トレンチについては、層厚5cm前後の腐植土直下で赤褐色系の砂礫土または、その下層の黄褐色系及び灰色系の粘土・砂礫土層が認められる。

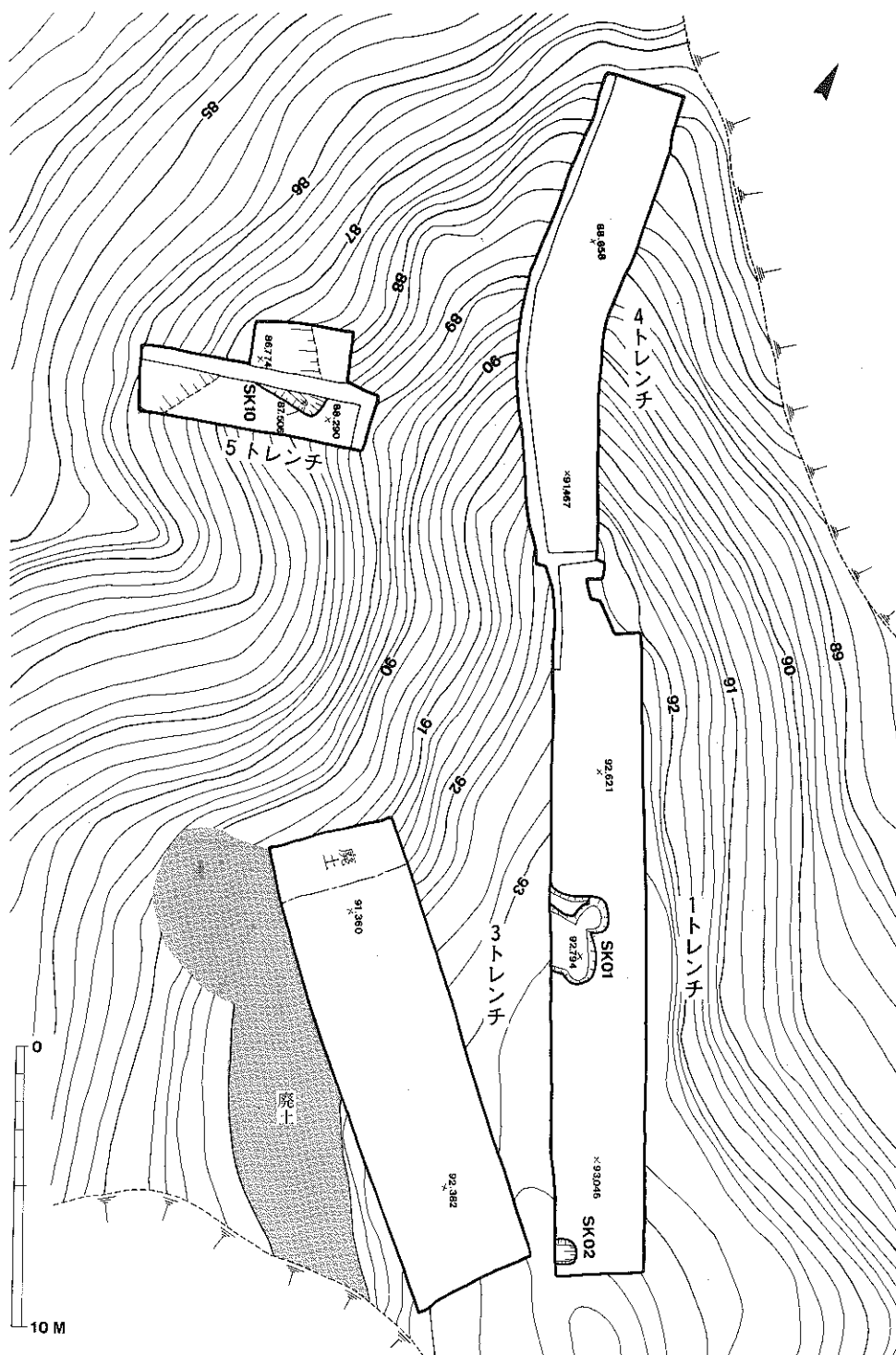
1トレンチは、東西3.5m、南北23mの南北トレンチである。機械による土砂除去後に遺構の追究を行ったところ、地山面に不定形土塊1を検出した。SK01は、東西2.3m、南北3m、深さ0.3m程を測る。黄灰色粘質土を埋土とする。遺物の出土はなく時期は不明。SK02は、表土より掘り込まれている土層である。焼土・炭が認められた。本トレンチでは、詳細な遺構の追究を行ったがこれ以上明確な遺構は認められなかった。

3トレンチは、1トレンチ西側の既存削平部分である。最も削平の著しい北側で、1トレンチ側の現地表との比高差は1.1m程に及ぶ。本トレンチでは、この既存削平部分に東西4.5m、南北17mの南北トレンチを設定し、土層断面の観察を主眼に清掃程度の掘削を行った。土層観察はトレンチ東側で行った。基本的層序は1トレンチと同様で、現地表下0.4m程で赤褐色系の砂礫土層となる。また、トレンチの整形後に遺構検出を行ったが、トレンチ北端で過去の削平時の除去土砂の堆積が幅2m程認められたほか、遺構・遺物とも認められなかった。なお、トレンチ西側の廃土はこの過去の削平時の除去土砂である。

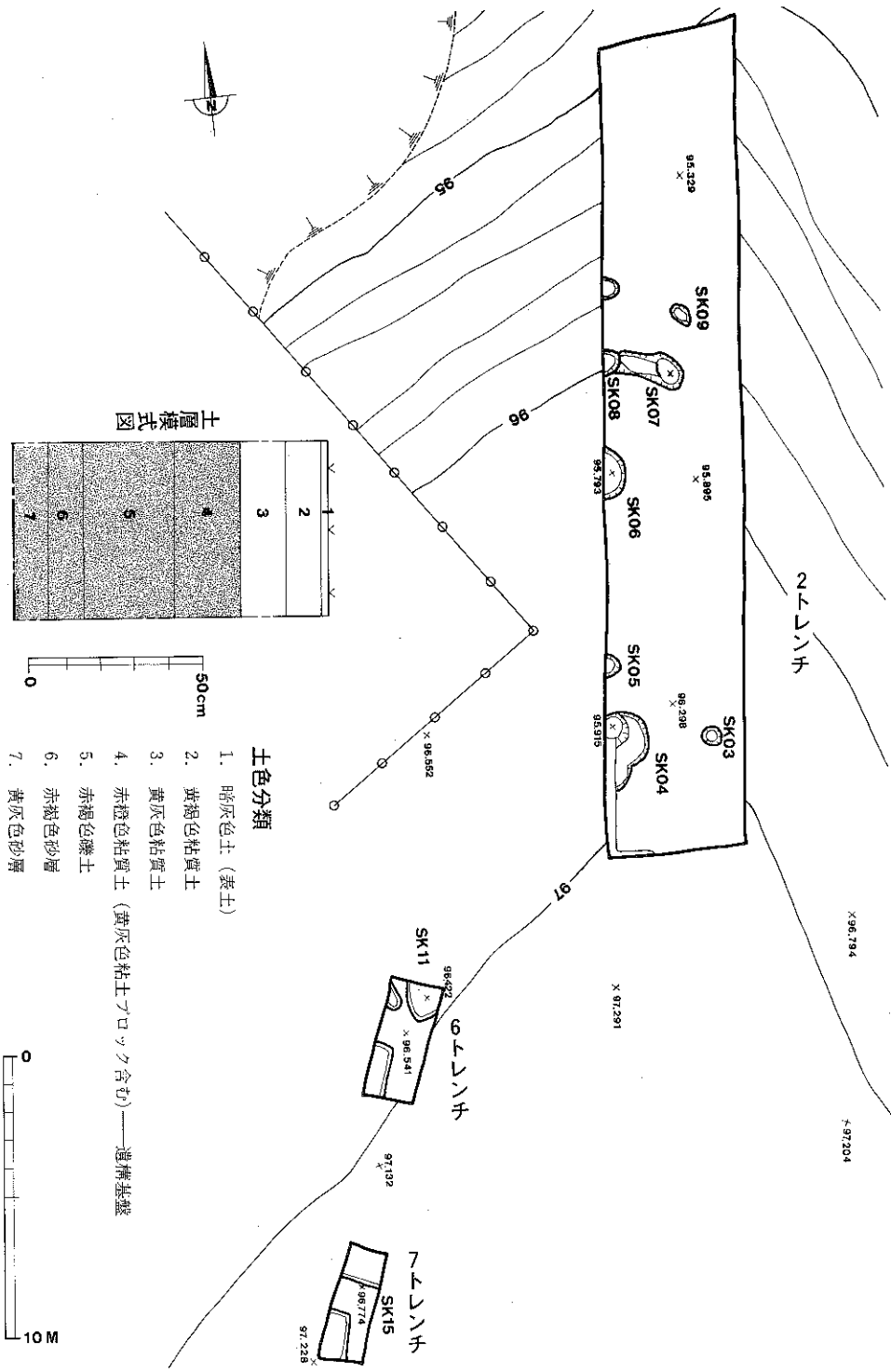
1トレンチ北側の丘陵斜面部には、標高88m前後で傾斜がわずかながら緩やかな部分が認められたため、4トレンチを設定し調査した。東西2.8m、南北19mの南北トレンチである。所々において地山面が認められることから、掘削にあたっては最初より人力による掘削を行った。丘陵頂部より斜面部にあたるトレンチ南側は、層厚5cm前後の腐植土を除去すると直ちに赤褐色系砂礫層の地山層が認められた。また、緩斜面部にあたるトレンチ北側も同様に5cm前後の腐植土直下で、黄褐色系及び灰白色系の粘土・砂礫土層が認められた。これらは4トレンチ東側の工事法面の尾根土層断面に認められる水平堆積をなす地山層である。つまり、本トレンチでは、自然丘陵を検出したにとどまったこととなる。

4トレンチ西側にわずかながら尾根上から西へ突出する部分が認められたため、5トレンチを設定した。東西9m、南北2.5mの東西トレンチである。掘削にあたっては、4トレンチと同様に当初より人力による掘削を行った。土層層序は基本的に4トレンチと同様である。層厚15cmの腐植土を除去すると直ちに、黄褐色系及び灰白色の粘土・砂礫層の地山層が認められた。遺構的には、トレンチ中央で灰色砂礫層を埋土とするSK10を検出した。北側にトレンチを拡張し遺構精査を行ったが、遺物の出土も認められず時期・性格とも不明である。検出の範囲では、東西3.5m、南北1.5m、深さ0.8mを測る。また、トレンチ西端では丘陵の自然地形が認められた。状況的には、丘陵斜面が標高87m程で急激に落ち込み状に変化

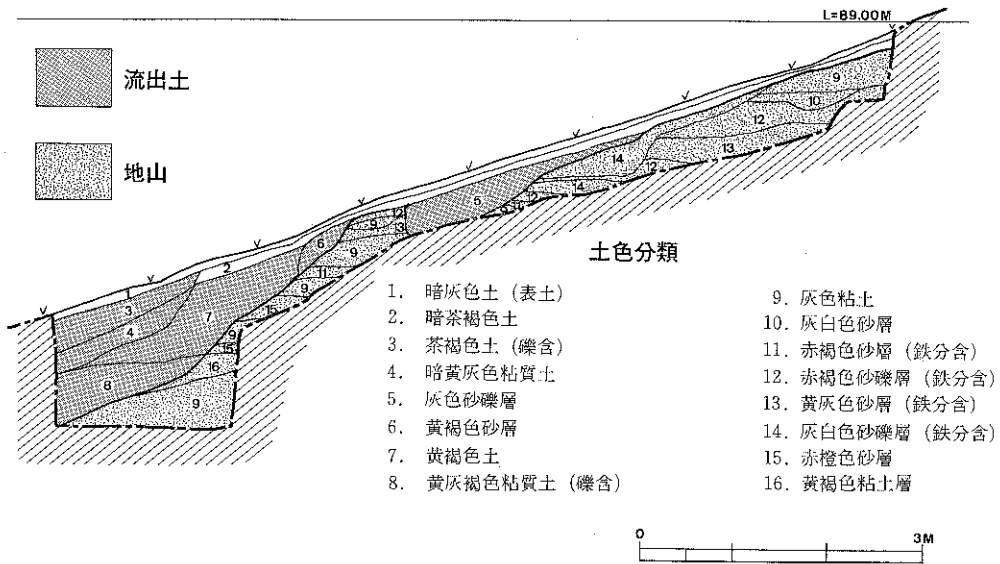
1. 尖山古墳等発掘調査概要



第3図 北部トレンチ実測図



第4図 南部トレンチ実測図



第5図 5トレンチ土層断面実測図

することから、本トレンチ位置も過去の人為的削平を受けている可能性が考えられる。

南部トレンチ 丘陵頂部平坦部に設定したトレンチ群。標高は概ね95~97m程を測る。掘削にあたっては、北部トレンチ群と同様に事前の土層確認により現地地表下0.3mで地山層が認められたため、まずパワーショベルを使用して地山層直上までの土砂除去作業を行い、その後人力による掘削を行った。認められる基本層序は北部トレンチ群と同様に、上層から、表土層の腐植土、黄褐色土、黄灰色粘質土、そして地山層の赤褐色系土層である。

2トレンチは、尾根中軸上よりやや東側に設定した東西5m、南北29mの南北トレンチである。土層層序は大局的には前述の基本層序のとおりだが、トレンチ北側・東側は層厚5cm程の腐植土直下で地山層が認められる。またトレンチ北端では一部に地山層が露出している箇所も認められる。遺構的には、すべての赤褐色粘質土の地山層にて黄灰色粘質土を埋土とする土層8を検出した。SK03は径0.6m、深さ0.4m程。SK04は東西1.5m、南北2.5m、深さ0.6m程。SK06は東西0.8m、南北1.5m、深さ0.2m程。SK07は東西3m、南北1m、深さ0.5m程をそれぞれ測る。これら以外の土層も含めすべて遺物の出土は認められず、土層の時期・性格ともまったくわからない。

6・7トレンチは、2トレンチの南側に設定した2本の南北トレンチである。6トレンチは、東西2m、南北4.2m、7トレンチは東西1.5m、南北4mを測る。認められる基本層序は2トレンチと同様である。遺構は両トレンチとも、2トレンチ南側のものと同一状況である。地山層の赤褐色粘質土にて検出、黄灰色粘質土を埋土とする。検出土層はすべて状況的にまとまりをなすものではなく、また遺物の出土も認められず時期・性格とも不明である。

I. 昭和63年度発掘調査

(3) ま と め

以上、調査の概要を各トレンチごとに述べた。最後にここでは、今回の調査の成果を再度整理して本報告のおわりとしたい。

既に述べたとおり、今回の調査対象地内においては、後世の人為的削平のため旧地形を失っている範囲が比較的多く認められた。そのため、断言しがたい部分もあるが今回の調査の中では、尖山古墳及びその関連遺構の存在する状況は認められなかった。

前述のとおり、調査地の立地する宇治丘陵西側一帯は久津川古墳群の所在するところであり、前期から後期にわたる大小100基近い古墳が複数の古墳群を構成している。これら久津川古墳を構成する古墳群のうち、城陽市と宇治市が接する丘陵上に位置する上大谷古墳群・西山古墳群・下大谷古墳群等は、基本的には丘陵の南側の谷及びその先に広がる平野部を意識して立地している。昭和62年度に本市教育委員会が実施した上大谷古墳群北側丘陵の発掘調査において、上大谷古墳群は、現在、市境となっている丘陵尾根を越えてその北側に及ばないことが判明している。このことから、前述の古墳群の占地は丘陵の南斜面つまり城陽市側に限られることとなる。それに対して、一本松古墳・庵寺山古墳等のように久津川古墳群の北端グループとされる宇治市側に所在する広野古墳群は、その多くは独立墳であり城陽市側に立地する他の古墳群とは様相が異なる。

一本松古墳は、調査地北東300m程の標高137mの丘陵最頂部に位置する独立墳である。木々のため一部視界がさえぎられるものの、墳頂部からは北西には京都盆地が、南西には南山城盆地が一望できる。自然流出のため一部に著しい墳丘の崩壊が認められるが、本市教育委員会が実施した測量調査の結果では、概ね一辺28m、高さ4mの方墳である可能性が考えられる。内部主体部は、割石積の堅穴式石室に割竹形木棺が用いられている。年代的には4世紀中葉と、久津川古墳群のなかでは最古の古墳といえる。

このような、久津川古墳群の中では他の古墳群と様相を異にする広野古墳群のあり方を考えると、今回の調査対象地内では尖山古墳の位置は確定しえなかったものの、過去に土器が出土したという伝承等を考慮すると当調査地周辺においてすでに消滅した古墳の存在を否定できない。今後なお、一層綿密な調査が必要であろう。

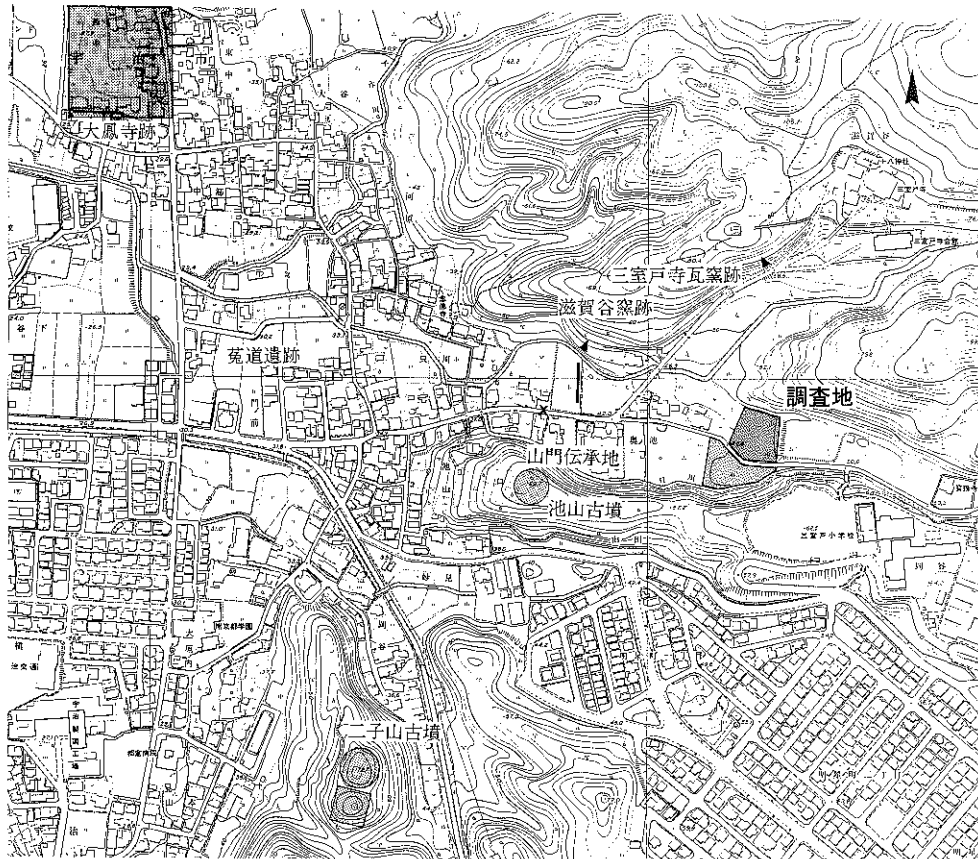
2. 三室戸寺子院跡発掘調査概要

(1) はじめに

本報告は、菟道奥ノ池20番地他において、大同建設株式会社の宅地開発に伴って実施した発掘調査の概要報告である。現地調査は、昭和63年8月4日から9月16日まで実施した。

当該対象地は、三室戸寺のかつての寺域内にあたり、30有余の塔頭子院が存在したと伝えられる所である。当該対象地西200mで昭和60年に本市教育委員会が実施した発掘調査^{註1}では、奈良時代の滋賀谷窯跡や平安時代から中世期にわたる遺構・遺物を発見している。

今回の調査にあたっては、当該対象地のうち、只川の旧流路が予測される南側を避け、北側に幅3m程、長さ40m程の南北トレンチを2本設定した。東側を1トレンチ、西側を2トレンチとする。最終的な調査面積は240m²である。



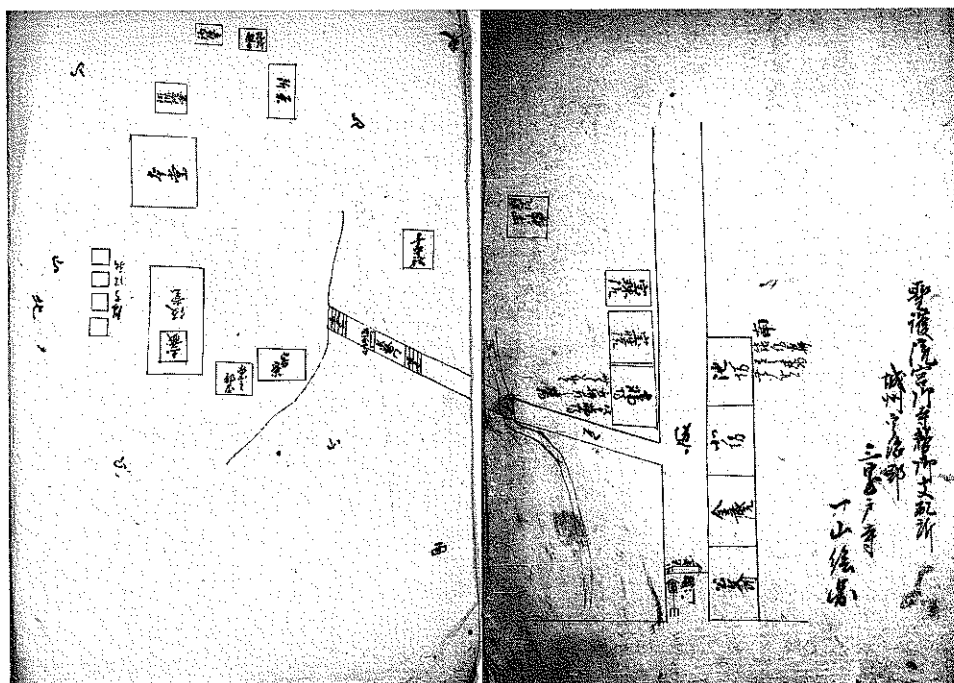
第6図 調査地位置図(1 : 7500)

1. 昭和63年度発掘調査

(2) 三室戸寺の沿革

西国三十三ヶ所観音霊場の十番札所として巡礼の絶え間ない三室戸寺^{註2}は、かつては天台宗寺門派の中本山であったが、現在は「明星山三室戸寺」と号する聖護院系の修験宗本山である。寺伝によると、宝亀年間(770～781)に光仁天皇の勅建により奈良大安寺の僧行表が開基したと伝えるが、一説には9世紀であるとの説もあり正確な開創時期はわからない。康和元年(1099)に白河・堀河天皇の帰依を受け、三井寺の修験僧隆明の中興により大いに伽藍の修造を行ったと伝える。丁度、平安時代の末期になると阿弥陀信仰にかわり、天台系の観音信仰がひろく人々の間に浸透し、三室戸寺も西国三十三ヶ所外観音霊場巡礼の三十三番札所として多くの巡礼をむかえた。そののち、本寺も数度にわたる戦火のため序々に衰えていったが、文明年間(1469～86)の後土御門天皇の勅命により再興されたと伝える。

現在の堂宇は、文化年間(1804～17)に再建された本堂をはじめ、阿弥陀堂・鐘楼等を残すにすぎないが、往時は30有余の塔頭子院を有した大寺であったという。天保15年(1844)に描かれた「三室戸寺一山絵図」には、参道入口付近に並び建つ公文所・金蔵院・北ノ坊・池ノ坊・十輪坊・宝性院・宝珠院の各子院が描かれている。調査地はこれらの東側に位置する。



第7図 三室戸寺一山絵図(天保15年1月、三室戸寺蔵文書)

(3) 遺 構

今回の調査は、前述のとおり只川の影響が大きく遺構の良好な遺存状況が望めない調査対象地南側は避け、北側に限って実施した。残念ながら三室戸寺子院に係る明確な遺構・遺物は認めることはできなかったものの、しかし、鎌倉時代から室町時代にわたる土壌・溝・石組み井戸・土器溜り等の遺構を検出することができ、当地におけるこの時期の土地利用状況と三室戸寺との関係を少しながら窺い知ることができた。以下、両トレンチで検出した遺構について順次その概要を述べることにするが、その前に調査地内における基本的層序について述べることにしたい。

(層 序)

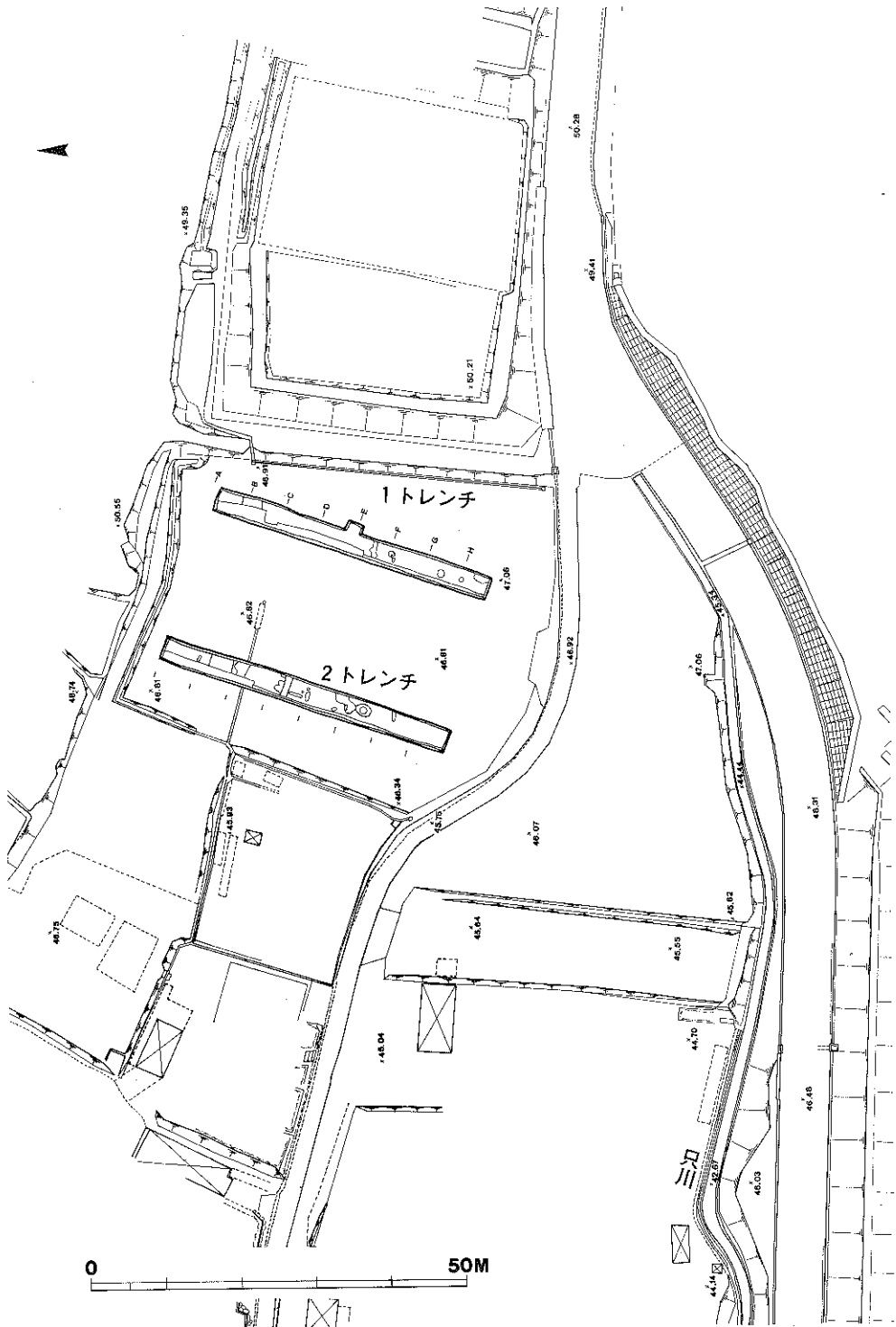
調査地で認められる層序は地区によって若干の差異はあるものの、大局的には次のとおりである。上層から、層厚25cm程の現代整地層・旧表土及び旧耕作土層があり、それに続いて層厚70cm程の盛土層そして滞水層の地山である。これらはさらに細く分層することができる。第2層の盛土層の最上層は層厚20cm程の炭・土器片を含んだ灰色粘土である。本層は所謂遺物包含層であるが、その状況からは明らかに二次堆積によるものであることがわかる。本層の下層には層厚10～20cm程の盛土層が数層堆積している。出土する遺物及びその堆積状況からすべて中世期の盛土層であることが理解される。そして、現地表下80cm程で滞水層の灰色粘土・灰色砂礫土・青灰色シルト・青灰色砂礫層等の地山層となる。これら地山層の確認はトレンチ北半分程の断割部分のみで確認したものである。中世期の盛土層の堆積状況は依然トレンチ南側も同様状況であることから、少なくともトレンチ内では盛土層下には滞水層の地山が続くものと考えられる。これら滞水層には種子・株根・流木等の植物遺体が見られ、かつては湿地的様相を呈していたことが理解される。また、トレンチ北端では只川の旧河道と見られる痕跡が認められ、同様にトレンチ断面には、中世期以降の旧河道も認められた。

このような基本層序から、当調査地は、旧河道とそれに伴う湿地に中世期を通して行われた何回かの盛土層に遺構が存在することとなる。今回の調査では、基本的には地山の灰色粘土直上に堆積する黄茶褐色砂質土が遺構基盤層となる。

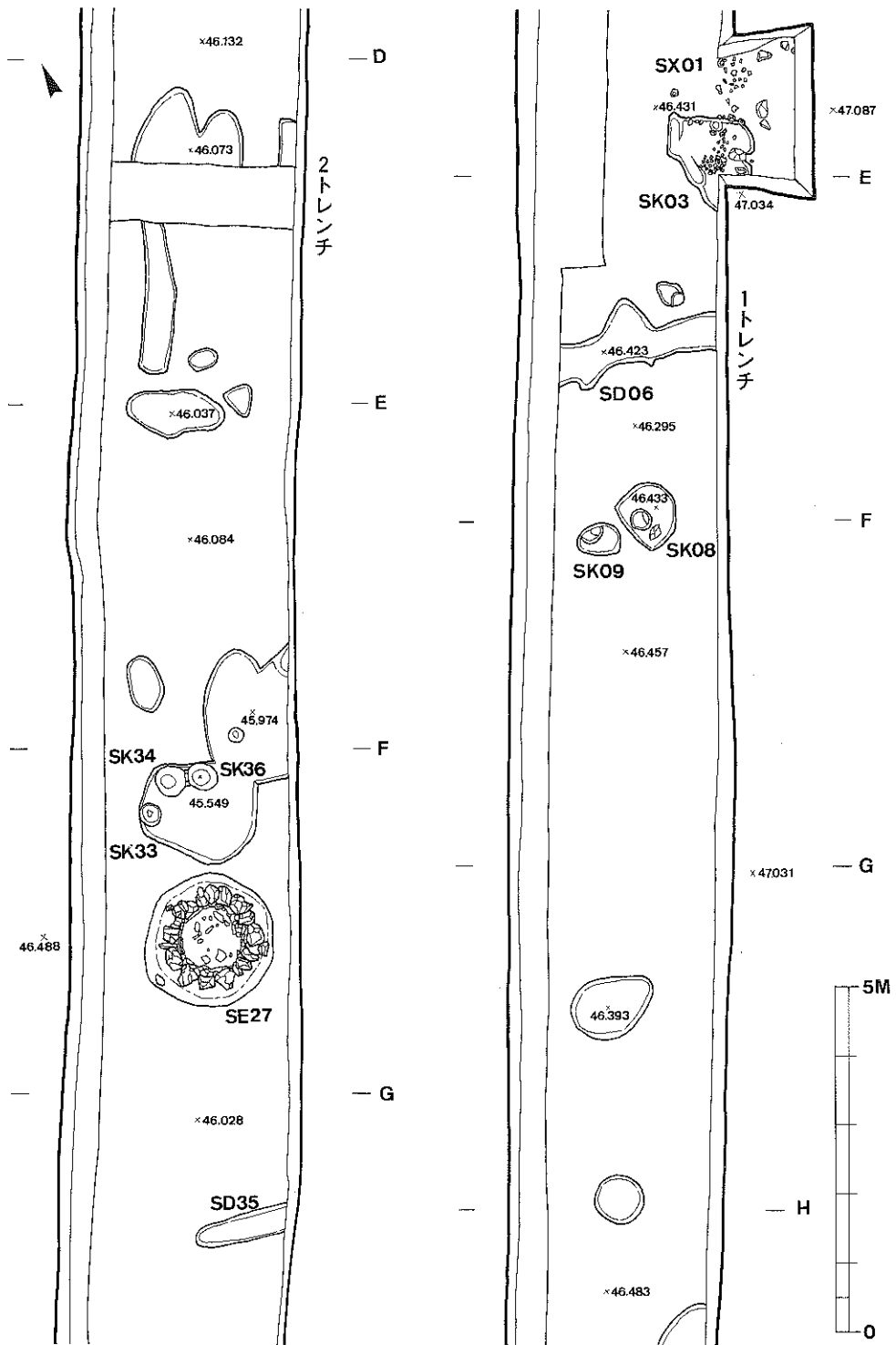
(1 トレンチ)

トレンチ北側のA～C区では旧河道のため安定した遺構面は認められず、そのすべてがD～H区より検出した。土器溜り2、土壌8、溝2がある。遺構検出面は、前述のとおり基本的には地山層直上の黄茶褐色砂質土である。しかし、トレンチ南側は本層と地山層の灰色粘土との間層にあたる茶褐色砂質土の遺物包含層上面でいくつかの遺構を検出していることか

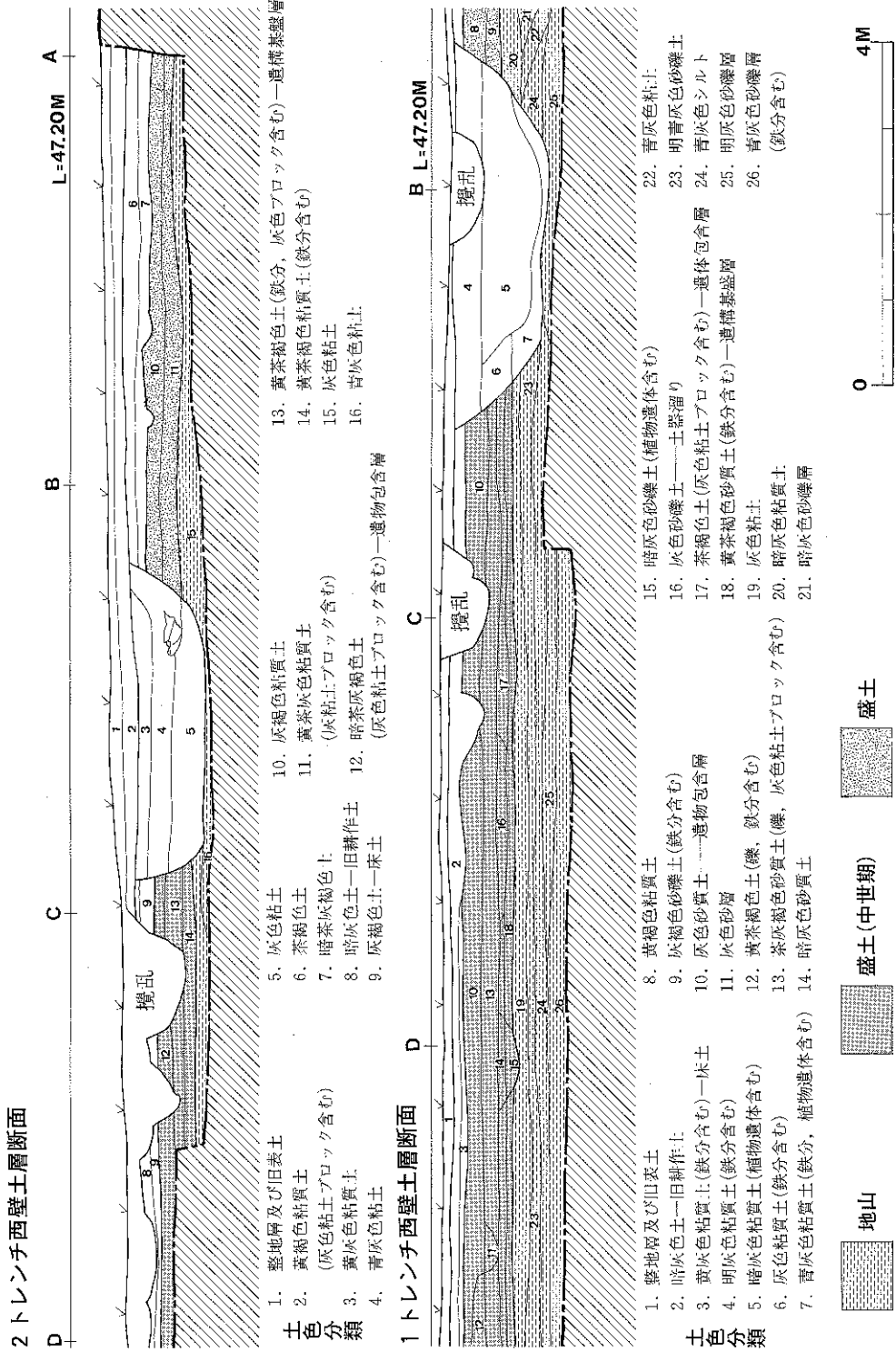
I. 昭和63年度発掘調査



第8図 トレンチ配置図



第9図 遺構実測図



第10図 トレンチ土層断面実測図

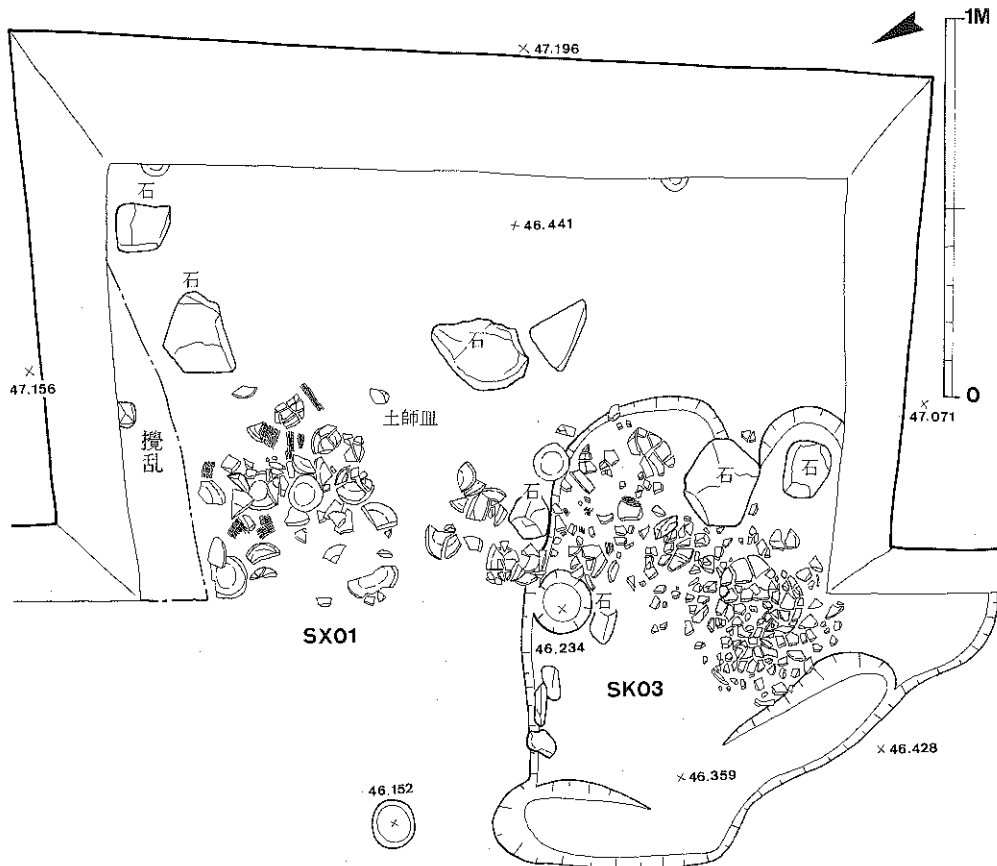
2. 三室戸寺子院発掘調査概要

ら、基本的には地山層の灰色粘土の直上層が、1トレンチの遺構基盤層といてよいだろう。では以下に各主要遺構についてその概要を述べる。

SX01 D区で検出した土器溜りである。概ね東西0.6m、南北0.8m程の広がりになかで、土師器の小皿・中皿十数枚が木炭とともに出土した。遺物の取り上げ後、土壌掘方の追求を行ったが掘方は認められなかった。遺物的には、そのほとんどがほぼ一個体分を残すもので、その出土状況からは単なる土器溜りとは考えにくいものである。

SK03 SX01南側で検出した土器溜りである。SX01と同様に木炭を伴った土師器の小皿・中皿が数枚分出土した。状況的には、SX01とよく似るが、SX01に比べ遺物は原位置を保つものの細片化したものが多い。遺物取り上げ後、東西・南北とも1.2m程、深さ0.1m程の土壌掘方を検出した。埋土は青灰色粘質土であり、遺物のほとんどは本層土面で出土した。また土壌内には、径17cm程の柱穴が認められた。

SX01とSK03の両者は、遺物の出土状況や土層層序から、ほとんど時期差のない土器溜りであるといえる。しかも、両者の東側では同一検出面で礎石と考えられる平坦面をもった



第11図 SX01・SK03 遺物出土状況実測図

I. 昭和63年度発掘調査

石列を3石程検出している。このような検出状況からは、両者は単なるゴミ穴とは考えられにくく、その性格は祭祀的な意味合いをもったものと考えられる。

SK08・SK09 F区で検出した土壌。SK08は東西0.6m、南北0.4m、深さ0.1m程を測る。SK09は東西0.8m、南北1m、深さ0.1m程を測る土壌である。それぞれ青灰色粘土の埋土を除去すると、共に径25cm程の柱穴を検出した。埋土は同じく青灰色粘土であり、深さ0.2m程で両者とも平坦面をもった0.2m大程の礎石を検出した。

SK11 SX01上層で検出した方形土壌。東西検出長1.4m、南北0.6m、深さ15cm程。検出面では、0.2m大程の割石で四方を囲まれた中央に、瓦器の平底鉢の底部片が出土した。

SD31 A・B区で検出した旧河道。2トレンチB区でも認められた。土層層序により中世期以降の只川の一時的な旧流路であったと思われる。上面で幅4.6m、深さ1.1m程を測る。埋土は大きく3層に分けられる。中層の暗灰色粘質土や下層の青灰色粘質土には、種子・株根等の植物遺体が堆積していた。

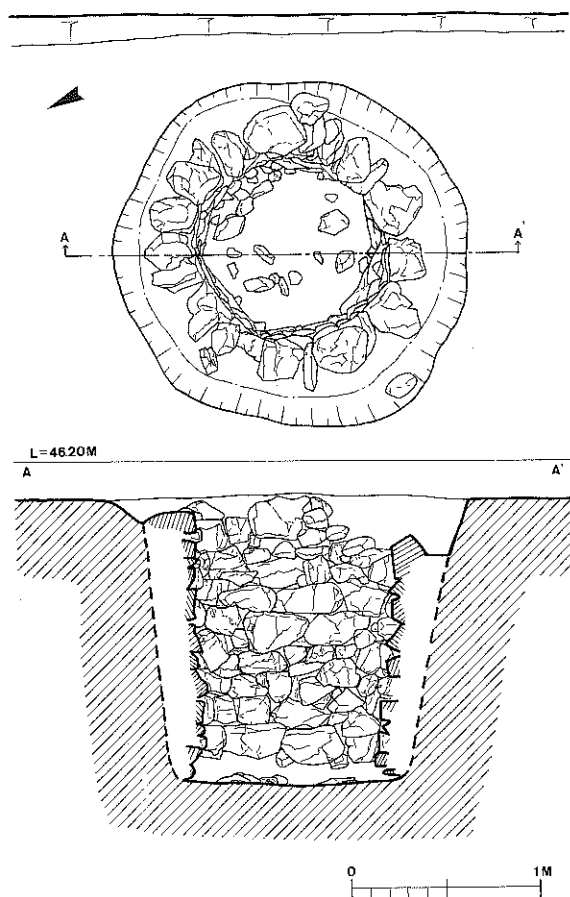
西壁土層断面土器溜り C区のとレンチ西壁土層断面に認められた土器溜り。上面で幅2.2m、厚0.1m程を測る。遺物的には本トレンチの他遺構より新しい一括資料が出土している。土師器の碗や小皿であるが、重さなった四枚の小皿の上に丁寧に土師器の碗が2枚かぶせてあり、その状況から単なるゴミ穴とは考えられない。

(2トレンチ)

2トレンチも1トレンチと同様、A～C区では安定した遺構面は認められず、そのほとんどがD～H区の地山層直上の黄茶褐色砂質土より検出。土壌11、溝3、石組み井戸1がある。

SE27 F区で検出した石組み井戸である。井戸の掘方はほぼ正円形で径1.9m程を測る。この中に人頭大の河原石を木口積みにし、円形の石組みを築いている。石組みの内径は底面で0.9m程、遺厚部上面で1.1m程、遺存高は1.5m程を測る。井戸内の埋土は大きく3層に分れる。埋土上層は検出面より30cm程の層厚をもつ灰色粘土である。本層は井戸破棄後の盛土層であり、細片化した土器片が見られた。本層を除去すると、中層の暗灰色粘性土中で、長径0.7m、短径0.4m程の転落石を検出した。石組み使用石材に比べはるかに大きく、井戸破棄時の封じ石的な意味をもつようである。この他にいくつかの転落石は見られたが、すべて石組み使用石材と思われる大きさのものである。この転落石除去後、概ね検出面下1m前後で直ちにシダ類の葉・自然木等の有機質遺物が出土。さらに、土器も完形のものが多く見られ、箸・漆器の椀・曲物等一括性の高い遺物が出土した。検出面下1.3m程で埋土も暗灰色砂質土となり、遺物の出土も減少。若干の土師皿と加工痕をもつ木片数点となる。さらに検出面下1.5m前後で石組みは途切れ、明灰色砂層と径20cm大の礫と拳大の礫が現われる。調査の手違いから全面とはいかないが、これら礫の上面と石組み下端部の高さが一致するこ

2. 三室戸寺子院発掘調査概要



第12図 SE27実測図

SK36 SK34と西面する柱穴。径0.5m、深さ0.4m程を測る。状況的に埋土はSK34と同様であるが、遺物的には土師器片数点が出土したのみである。

とから、この礫の上面が井戸の底部となるようである。

遺物的には既に若干述べているとおりであるが、前述の転落石以下の埋土つまり暗灰色粘性土層中に含まれる土器が一括性の高い概ね15世紀末頃のものである。また、同層中には、径5cm、長さ31cm程の青竹に、内をくり抜いて木炭を詰めこんだものが出土した。

SK33 F区で検出した柱穴。径0.45m、深さ0.1m程を測る。底部に一辺10cm程の礫が遺存。

SK34 SK33北側で検出した柱穴。径0.5m程。検出面下5cm程で拳大程の鉄滓塊が5個程出土した。さらに検出面下0.4m程で青灰色粘土の埋土となり、径0.3m程、遺存高0.2m程の柱根らしき丸太材が出土した。

(4) 遺物

今回の調査で出土した遺物には、土師器・瓦器・中世陶器・輸入陶磁器等の土器類のほか、漆器の椀や曲物・箸等の木製品と若干の石製品、土製品がある。量的にはコンテナー6箱分程であり、そのうち6割程が土師器の皿によって占められている。また、これらのほとんどが、二次堆積による中世期盛土中の遺物包含層中出土のものであるため、その遺存状態は概して悪く細片のことが多い。時代的には、平安時代末期から室町時代後半期にわたるものであるが、その中心となるのは、12世紀後半および15世紀後半頃の土師器皿である。

以下、土器類、木製品、その他の遺物と分け、遺構ごとに順次その様相について述べる。

なお、土師器の皿の形態的特徴および型式分類、またその実年代の比定については基本的には、平安京左京内膳町^{註3}調査に準拠する。

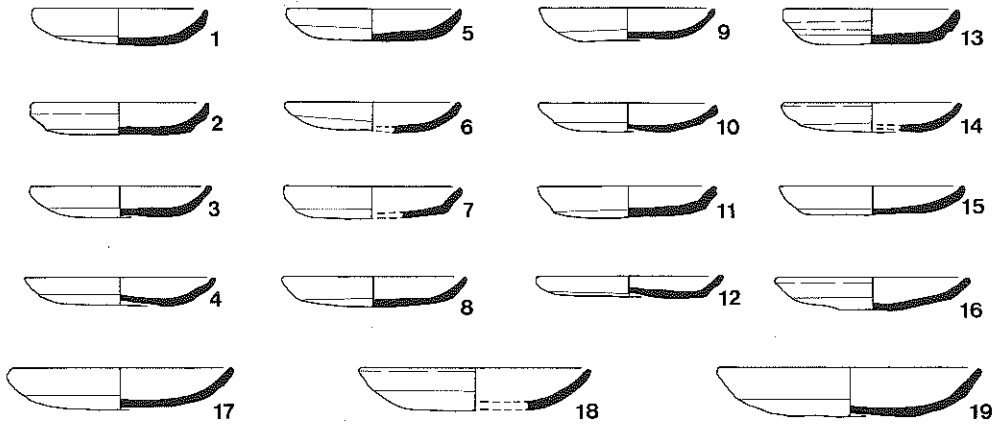
(土器類)

SX01出土の土器 ほぼ完形に近い土師器の皿が炭と伴に20数枚分出土している。他器種のものはない。土師器の皿はその法量により、平均口径14cmの大皿と、12cmの中皿、9.5cmの小皿の3種がある。その8割は小皿のものである。大皿(19)と中皿(17・18)は、口縁部に2段のヨコナデを施すものもあるがその痕跡は不明瞭なものである。体部は直線的なものと同内湾気味のものが見られる。口縁端部は丸く収める。小皿はその形態・色調から2つのタイプに分けられる。大皿の小型品のもの(1・3・4・6・8～10・13・14・16)と、浅形で比較的明瞭な底部と体部との境をもつもの(2・5・7・11・12・15)とがある。後者は、口縁部を一回のみ挟るように横ナデを施すもので、胎土的には灰褐色を呈し金色に光る黒雲母を含むことを特徴とする。前者は、橙褐色から淡褐色系と一様ではない。しかし、橙褐色を呈すもの(4・14)は一様に比較的薄手の良質の胎土をもつもので、他のものと容易に識別できるまとまりをなすのが注目される。

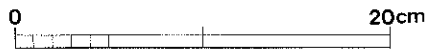
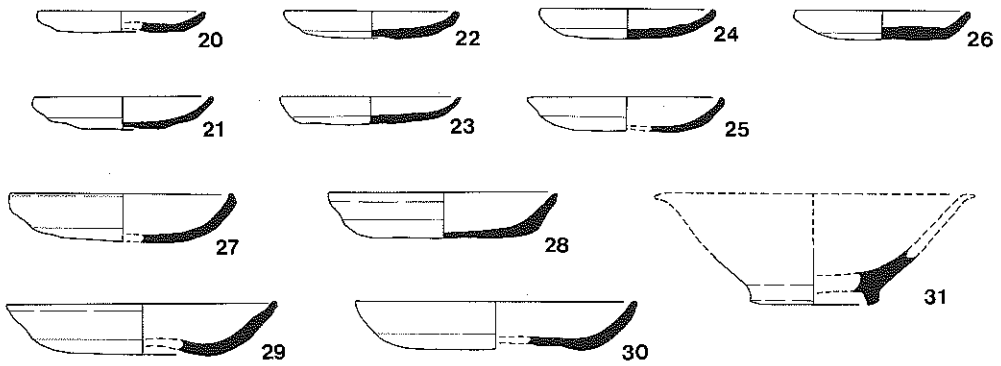
これら土師器の様相は、概ね平安京左京内膳町SE288上層に似ることから、実年代も12世紀後半頃のものと見えるだろう。

SK03出土の土器 土壌埋土の青灰色粘質土上面で検出した。出土状況もSX01に類似するが、SX01に比べ細片化したものが多い。大半が土師器皿で、他に白磁椀の高台片等数点がある。土師器の皿はその法量より、平均口径14.6cmの大皿、11.9cmの中皿、9.4cmの小皿の3種がある。その大半が小皿である。大皿(29・30)・中皿(27・28)は、SX01のものと同基本的には大差はないが、やや古いタイプのものも見られる。小皿もほぼ大皿・中皿と同じ様相をもつ。また、SK03でも橙褐色を呈すグループ(21・22・25・27・30)が認められた。年代的には、SX01より若干古いタイプの特徴をもつものの、ほぼ同時期と考えてよい。

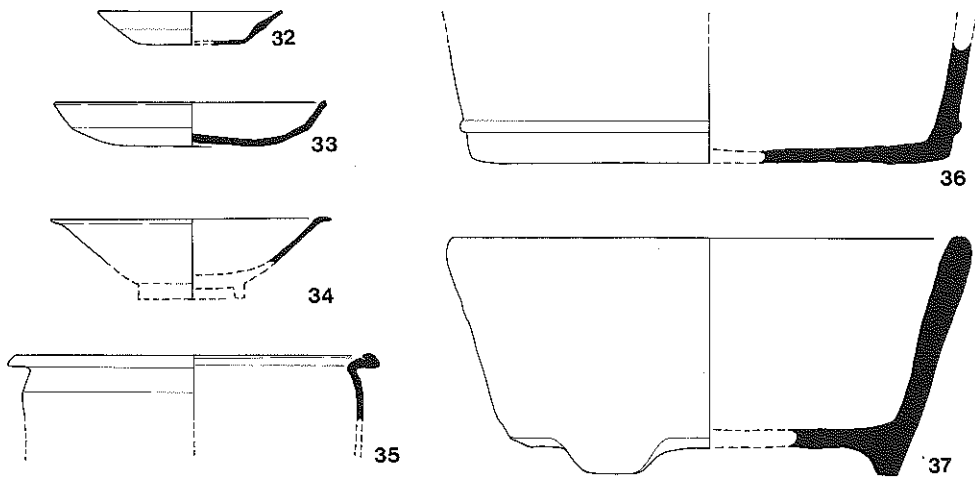
SX01



SK03



SX11



第13図 土器実測図 (1)

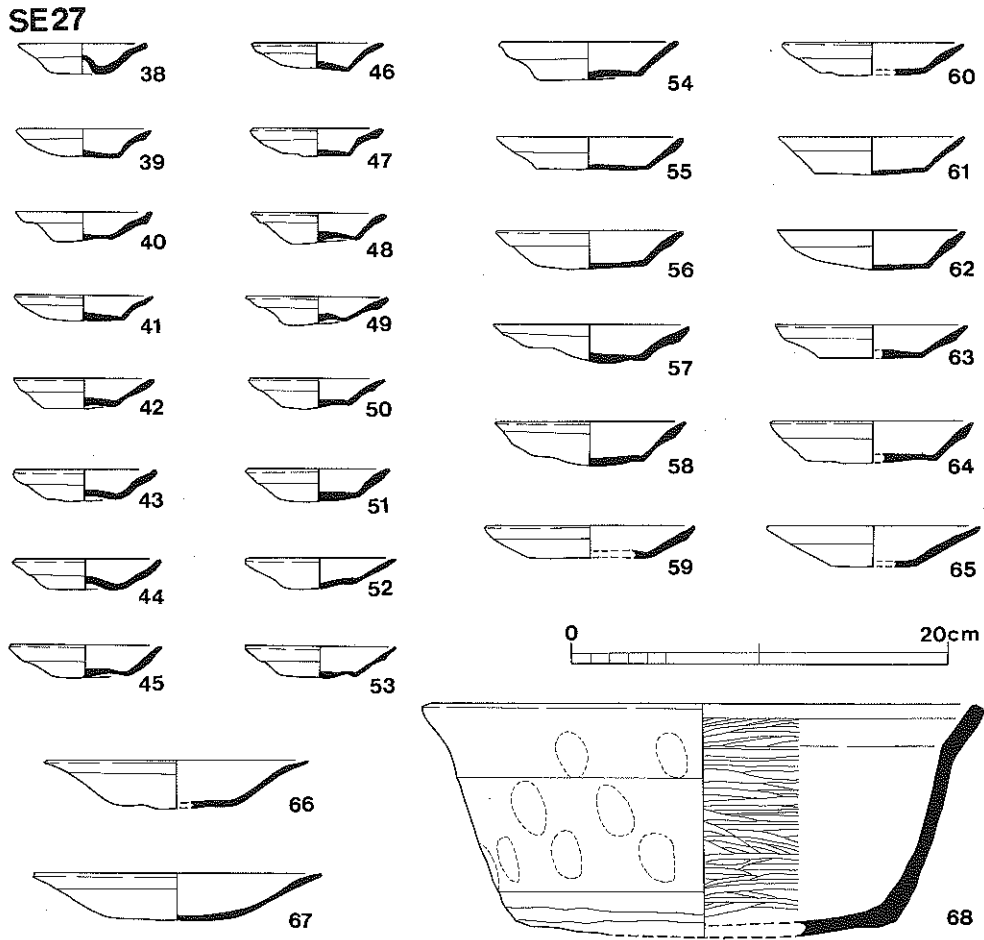
I. 昭和63年度発掘調査

SX11 出土の土器 SX01 検出面の上層で検出した方形土壙より出土したものである。資料数も少なく破片品であり全形が窺えるものは少ない。土師器では、大皿(33)・小皿(32)、羽釜(34)がある。小皿は平らな底と直線的な体部をもつものである。羽釜(35)は大和産のものであろうと思われる。瓦器では火舎(36・37)がある。37は3足のもので口径27.4cm、器高12.5cmを測る。白磁では碗(34)がある。口縁部を外側へ水平に屈曲させるもので、口縁部内面に2条の沈線が施されている。

SE27 出土の土器 SE27 中層埋土の暗灰色粘性土中で木製品と伴出した一括資料である。土師器の大皿・中皿・小皿60点程と瓦器の鍋1点があり、他のものは見られない。大皿(66・67)は平均口径14.5cm、器高2.5cmを測る。底部と体部の境が不明瞭な形態と外反する口縁部をもつ。器壁は概して薄く胎土は灰白色の良質のものである。中皿(54~65)は平均口径10.1cm、器高2cm、小皿(39~53)は平均口径7.4cm、器高1.6cmを測る。両者とも同一形態・色調を呈す大・小のものである。強いヨコナデのため明瞭な底部と体部との境をもち、口縁部は強く外反する。赤褐色から灰褐色を呈す。煤が口縁部の一部または全周に付着している燈明皿が、全体の2~3割程認められるのも注目される。また、灰白色を呈す所謂へそ皿と呼ばれるもの(38)が1点だけ見られた。口径6.9cm、器高1.7cmを測る。瓦器の鍋(68)は口径28.8cm、器高12.4cmを測る。平底に内湾気味の体部と外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りにより外傾する端面をもつ。体部内面は丁寧なヘラミガキを、口縁部はヨコナデを施す。体部外面はユビオサエのままである。体部外面ほぼ全面にふきこぼしが付着する。これは欠失する底部破断面にも付着することから、底部が破損した後も何らかの形で使用された可能性がある。

これらの様相は、平安京左京内膳町SK142出土の土器のそれと類似することから、年代的には概ね15世紀後半頃と考えてよいだろう。

土層断面出土の土器 これらは、1トレンチ西壁土層断面の崩壊時に偶然にも検出した土器溜りより出土したものである。土師器の中皿・小皿10数枚と羽釜小片1点がある。これらは一括性が高いもので、特に小皿4枚(69~72)と中皿(74・75)は丁度入れ子のように重ねて出土した。中皿は形態・色調により2種に分けられる。74~77は、深めの丸味を帯びた碗に近いタイプである。器壁は薄く口縁部はやや外反する。胎土は良質なもので灰白色を呈す。平均口径11.5cm、器高2.8cmを測る。78・79は、旧来よりの伝統的タイプのものである。平底に外反する口縁部をもつ褐色系胎土のものである。小皿も同様に2種に分けることができる。重なって出土した69~72は、所謂へそ皿と呼ばれるものである。平均口径7.2cm、器高1.7cmを測る。丸味を帯びた体部と突出する底部をもつ。胎土は良質なもので灰白色を呈す。73は浅形のもので平な底部と直線的な口縁部をもつ灰褐色系の胎土のものである。口径8cm、



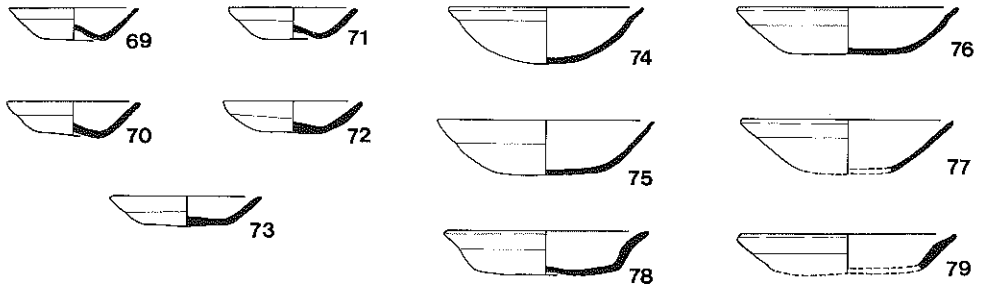
第14図 土器実測図 (2)

器高1.6cmを測る。これらの土師器の皿の様相は、平安京左京内膳町SE372に似ることから、実年代的には14世紀後半期のものと考えられる。

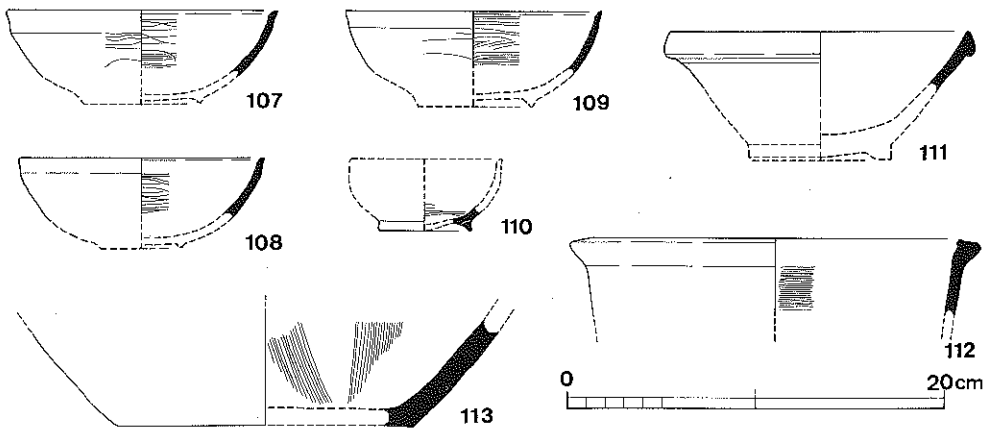
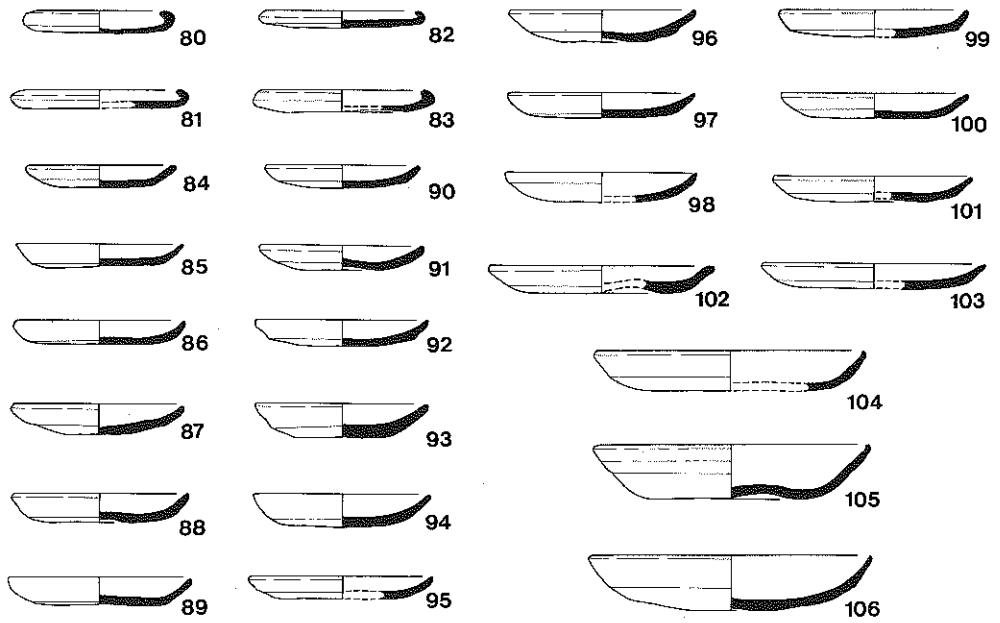
遺物包含層出土の土器 遺物包含層からは、土師器の大皿・中皿・小皿・鍋・羽釜・瓦器の椀・小椀・壺・火舎、中世陶器の壺・鉢、輸入陶磁器の白磁椀・盤等が出土している。土師器の大皿(104~106)は、平均口径14.7cmを測るもので不明瞭ながらも2段のヨコナデと内傾する口縁端部をもつものである。中皿(102・103)は平均口径12cmを測る浅形のものである。小皿は形態・色調的に3種に分けられる。80~83は、口縁端部を内に折り曲げた扁平な皿である。細片のものばかり、平均値はつかめない。85・87・92・96・99は、口縁部を一回のみ挟るように横ナデを施すもの。灰褐色を呈し金色に光る黒雲母を含む胎土のものである。平均口径9.4cmを測る。

瓦器の椀は、体部外面にヘラミガキを残すもの(107・109)ともたないもの(108)が見られ

1 トレンチ西壁土層断面土器溜り



遺物包含層



第15図 土器実測図 (3)

る。小椀(110)は、高台径5cmを測る高台片で内面底部近くまでヘラミガキが認められる。中世陶器には、図示できなかったが東播系の鉢や備前焼の需鉢等がある。また、輸入陶磁器も少量ながら見られた。磁器は白磁の椀の口縁部片・高台部片6点程である。口縁部形は玉縁のものと口縁端部を水平に外反するものがある。

これら遺物包含層出土のものは、層的に遺構面直下のものと上層のものに分けられる。前者はSX01・SK03直前のもので実年代的には、12世紀中葉頃のものである。また後者は土師器の皿の一部を除くもので、概ね12世紀末から13世紀前半頃のものである。

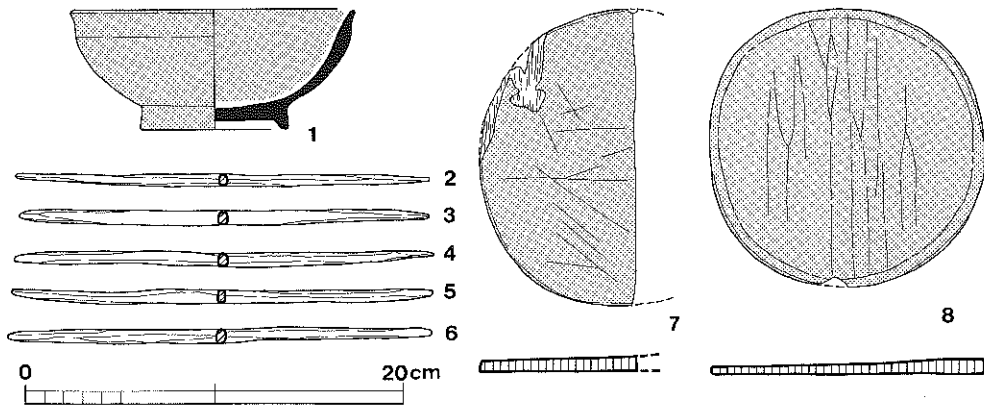
(木製品)

木製品では、漆器の椀・曲物、箸のほか加工木材等がある。そのすべてがSE27の中層埋土の暗灰色粘性土中より出土したものである。

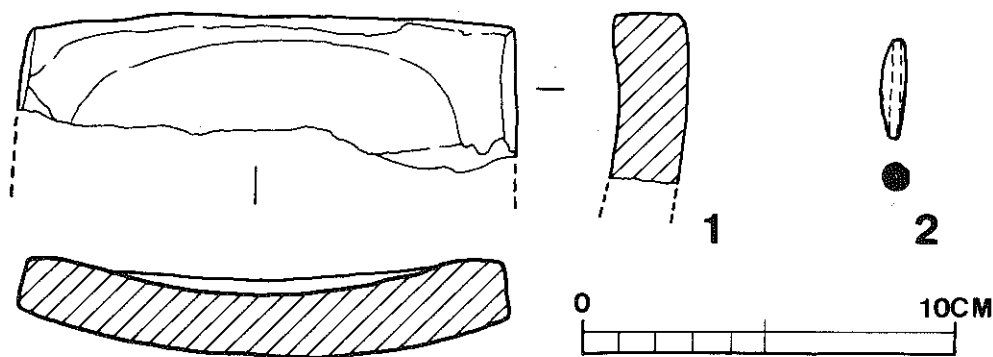
漆器椀(1) 破片化して出土した。底部以外は歪みが著しくその形態・法量は机上復元によるものである。口径15cm、器高6.4cmを測る。高台は高いものであるが高台裏は高台高の中程までしか削り出さない。体部上部で器壁は最も厚く口縁部はやや外反するものである。内外面に黒漆塗を施す。

箸(2～6) 20数本分がある。すべて断面六面体の両削りのものである。長さ22cm程。

曲物(7・8) 2個体分ある。両者とも目釘穴等が認められないことから底抜とした。7は径15.5cm、厚さ0.6cmを測る。片面のみ黒漆塗りを施し、他面は白木のままで一面に細かいキズが認められる。8は径14.6cm、厚さは0.3～0.8cmである。7と同様に片面のみ黒漆を塗布する。漆は左右方向にそして外周に沿って弧を描くように塗りわけられる。鉋の削り目が明瞭に残る。片面は白木のままで平滑に仕上げる。また曲物の側板と思われる長さ24cm、幅4cm、厚さ0.2cm程の征目板もある。



第16図 SE27出土木製品実測図



第17図 石製品・土製品実測図

(その他の遺物)

石製品 滑石製の羽釜片と不明品がある。羽釜は遺物包含層より出土したタガ部小片と体部小片である。内外面とも荒い成形ののち磨いて調整している。体部外面側にはタガ下半に煤が付着する。もう1点は同じく遺物包含層中より出土した滑石製の不明品である。幅13cm・厚さ2cm程を測る。端部より3.5cm程遺存する。断面形は緩やかに弧を描くもので、内面側は浅く凹む。成形ののち荒いがノミで調整を施す。

土製品 土垂がある。SK03より出土したものである。長さ2.7cm、径0.3cmを測る。

瓦類 少量の瓦片が荒掘時に遺物包含層中より出土している。数量的には10数点である。瓦当片は1点であとは丸瓦片・平瓦片が折半する。そのほとんどが、表面暗灰色で内部は灰色を呈す堅緻な胎土のもの。平瓦の凸面には明瞭な縄目痕をもつ。瓦当片は、丸瓦との接合部と瓦当面の一部を残す複弁蓮華文軒丸瓦である。さらに2点程、二次的焼成を受け橙褐色に変色しているものも見られる。

また、既に若干ふれたが、SE27の下層埋土直上層より用途不明の竹製品が出土している。径5cm、長さ31cmの青竹の節部分を取り筒型とし、その中空になった部分に木炭を詰め込んだものである。井戸水の浄化を願ったものであろうか。径5cm、長20cm程のものと2点ある。竹製品ではこの他に、長さ20cm程の竹の片方を斜めに切り落したものが3点程ある。これらはすべて、中層埋土中に垂直方向に突きささっていたものである。

以上、今回の調査で出土した遺物の概要を述べた。時代的には、12世紀後半と15世紀後半のものがその中心をなしている。しかし器種的には、圧倒的に土師器の皿が多く他器種のは少いようである。

(5) ま と め

以上、今回の調査で知り得た遺構・遺物についてその概要を述べてきた。最後に、これらその成果を再度整理するとともに、若干の説明を加え本報告のまとめとしたい。

(旧河道との関係)

現在、調査地の南側には丘陵に沿って只川が流れている。この只川は、三室戸寺の現参道入口西130m程で北側を流れる戦川と合流し名を戦川と変えさらに西流する。参道入口の三室戸寺駐車場西側で昭和60年度に本市教育委員会が実施した滋賀谷窯跡の灰原の調査では、現在北側丘陵裾を切断するように流れる戦川が、12世紀から14世紀頃には、小字奥ノ池のほぼ中央に流れていたことが判明した。そして、この戦川の流路の変化は、かつて調査地の西側にあったと伝える三室戸寺山門との関係から、伽藍整備事業の一環として戦川の流路変更が実施された可能性を指摘した。

今回の調査では、二次堆積による遺物包含層出土土器による年代比定のため確実な年代比定は断断できないが、少くとも検出された遺構より土層断面に認められた滞水層は12世紀中葉以前の只川の旧流路およびそれに付随する湿地帯であったと考えられる。とすれば、遺構の状況から、現在調査地の南側の丘陵裾を切って流れる只川は、15世紀後半以降一時的に調査地内に西流するものの、基本的には12世紀中葉頃に流路の付け替えが行なわれたと推察される。

(三室戸寺との関係)

今回検出した遺構・遺物は、只川の流路変更後の旧流路に行った盛土中で確認した。

遺構的には、石組み井戸SE27以外のものは遺構性格の不明確なものが多いものの、SX01・SK03等一般的な集落遺構とは違った様相をもつ事も今回の遺構の特徴といえる。また、遺物的には、これら遺構から出土した土器類では、所謂土師皿と呼ばれる土師器の皿が多い。一般的には土師器の皿は使用時の破損率が高く、一般集落跡で出土する土器の中でもその比率は高いとされる。しかしながら、今回の調査では圧倒的にその数は多く、瓦器の椀・鍋、土師器の鍋・羽釜といった器種は少い。これは、各器種の遺存状態の差ではなく実数として少いと考えてよいだろう。また、当時としては高級品である漆器類、白磁椀、南方系の盤等が少量ながら出土していることも注目される。

遺跡の中心となる年代は12世紀後半および15世紀後半であり、この両時期は三室戸寺の沿革で述べたとおり、僧隆明による康和年間の中興および後土御門天皇の勅命による文明年間の再興の時期にあたるのである。そして、前掲の「三室戸寺一山絵図」には、公文所・金蔵院等近世末期まで存続した8つの子院が描かれている。調査地はまさにこれらの東側にあた

I. 昭和63年度発掘調査

るのである。

以上、このような状況を考え合わせると、今回の調査では明確な子院跡遺構は検出できなかったものの、調査で知り得た事柄を積極的に理解すれば、今回検出した遺構・遺物は三室戸寺子院関連遺構である可能性が高いと見てよいだろう。かつての存在したと伝える30有余の塔頭子院については、現在に至ってはその具体的内容は一切不明である。しかしながら、今回の調査の結果、少くとも関連遺構が存在することが判明した。今後とも当遺跡においては一層線密な調査をもって対応しなければならないであろう。

(註)

- 註 1. 「滋賀谷窯跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 昭和62年。
- 註 2. 『宇治市史』第1巻 昭和48年
- 註 3. 「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980 第3分冊 京都府教育委員会 昭和55年。伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和62年。伊野氏は、10世紀から18世紀にわたる土師皿を編年されている。編年にあたっての資料の分類は形態と色調に注目され、A～Iタイプの9種に分類されている。本報告では基本的に氏の分類を踏襲したが、タイプ名称については使用しないこととした。

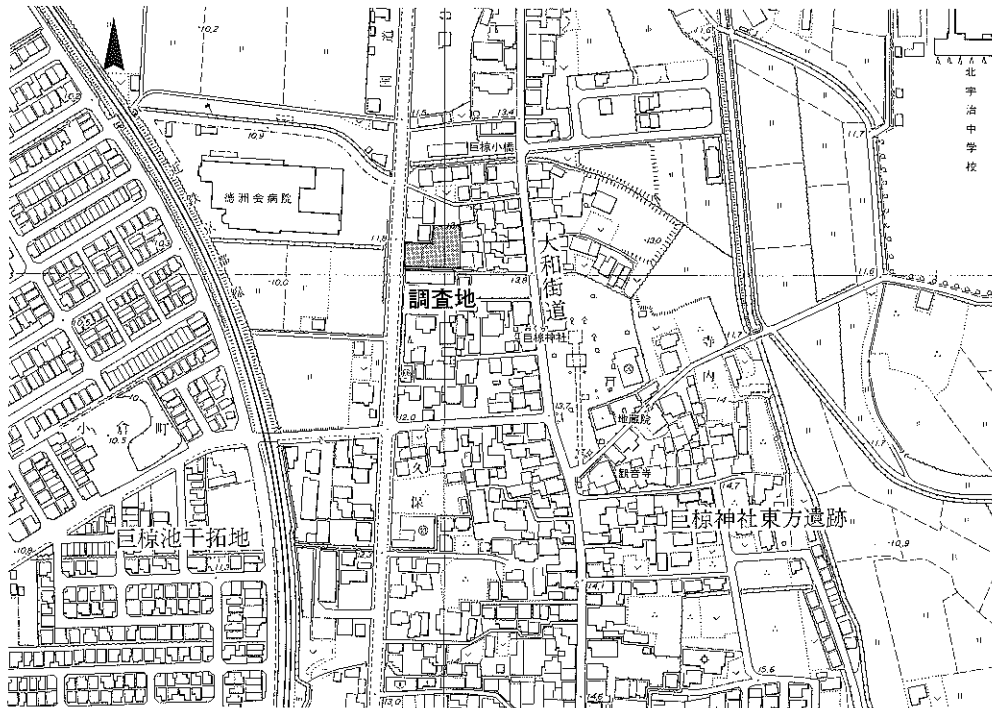
3. 小倉環濠集落遺跡発掘調査概要

(1) はじめに

本報告は、宇治市小倉久保15番地他において、株式会社晃商による店舗建設に伴って実施した発掘調査の概要報告である。調査期間は、平成元年3月6日から同年3月31日までである。調査面積は150m²である。4月以降も若干の調査を予定している。

当該対象地は、標高40~80mの宇治丘陵から旧巨椋池へ向って北へ岬状にのびる沖積台地上に位置する小倉の集落の北端部にあたる。現地形の標高は12m程である。

かつて存在した巨椋池の南側にあたる当地域には、中世期の防禦集落である環濠集落が現在もおその特徴を残し分布する。当該地の位置する小倉旧集落の場合は、豊臣秀吉による宇治川の流路変更、大和街道の新設によりその姿を大きく変えたであろうが、その立地状況から小倉もかつて環濠集落としての特徴をもっていたと考えられている。また、当該地の南側に位置する巨椋神社東方遺跡や神楽田遺跡からは、中世の土器と共に弥生土器が出土して^{註1}おり、弥生時代の遺跡存在の可能性も高い地域である。



第18図 調査地位置図(1:5000)

I. 昭和63年度発掘調査

(2) 遺 構

当該対象地は、その立地条件や過去における周辺地の発掘調査の成果より、近世期において一定量の土盛りが行われていることが予想された。そのため、調査にあたっては対象地の南東寄りに当該対象地地形に合せ、L字形のトレンチを設定した。東側の南北トレンチを1トレンチ、西側の東西トレンチを2トレンチとした。掘前にあたっては、遺構面直上の中世遺物包含層まではパワーショベルを使用し土砂除去作業を行い、その後は人力にたよった。

1トレンチではトレンチ北側、2トレンチでは西側で安定した遺構面が認められた。検出した遺構は、中世期の土壌・溝・柱穴のほか近世期の土壌・落ち込み遺構等がある。順次その概要を述べる前に簡単に土層層序について述べることにしたい。

(層 序)

調査地内に認められる基本的な層序は大別すると次の5層である。上層から現代整地層・旧表土および旧耕作土層、黄褐色系の粘土・砂層の流入土および近世盛土層、茶褐色系の中世遺物包含層、黄褐色系の遺構基盤層、そして黄褐色系砂礫層の地山である。つまり、現地表下1.8m、標高11.2m程に中世の遺構面があり、その上にそれに伴う層厚0.2m程の遺物包含層、そしてその直上に層厚0.1m程の灰色粘土が堆積したのち、1.4m程におよぶ近世盛土層が堆積することとなる。また、近世盛土は単一様相を示すものではなく、炭・土器片を含んだ土層の上に砂層・シルトの流入土がありその土に粘質系土層、そして炭・土器片を含んだ土層といった状況が看取できる。まさにこの地における水との戦いの跡を示している。この状況の中で、近世期の生活面が2ないし3面程認めることができた。しかし、今回の調査では、中世期以前の安定した遺構面の検出を主眼としたため、近世期のものについては土層観察による確認にとどめることとした。

それでは以下に、各トレンチで検出した遺構についてその概要を説明することとする。

(1トレンチ)

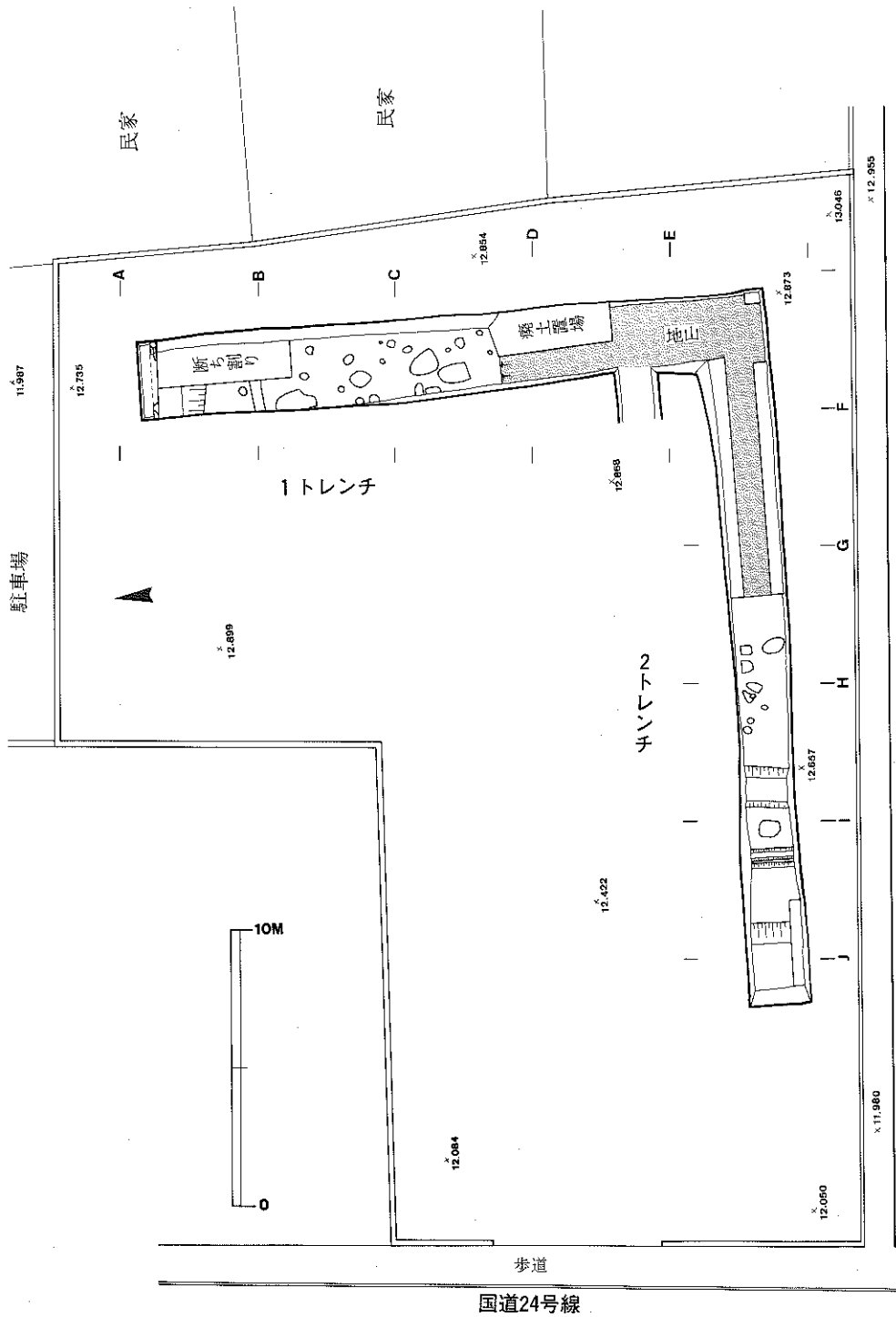
1トレンチでは、トレンチ北側A～C区において中世期の安定した遺構面を確認した。検出遺構には、土壌5、溝1、柱穴12、小ピット7と近世期の落ち込みがある。

SD03 B区で検出した東西溝。東西検出長2.7m、幅0.5～0.6m、深さ0.25m程を測る。埋土は暗茶褐色土。瓦器の椀、土師皿が出土した。

SK04 SD03南で検出した不定形土壌。東西検出長1m、南北1.4m、深さ0.35m程を測る。若干の土師器の皿・甕、弥生土器の甕片が出土した。

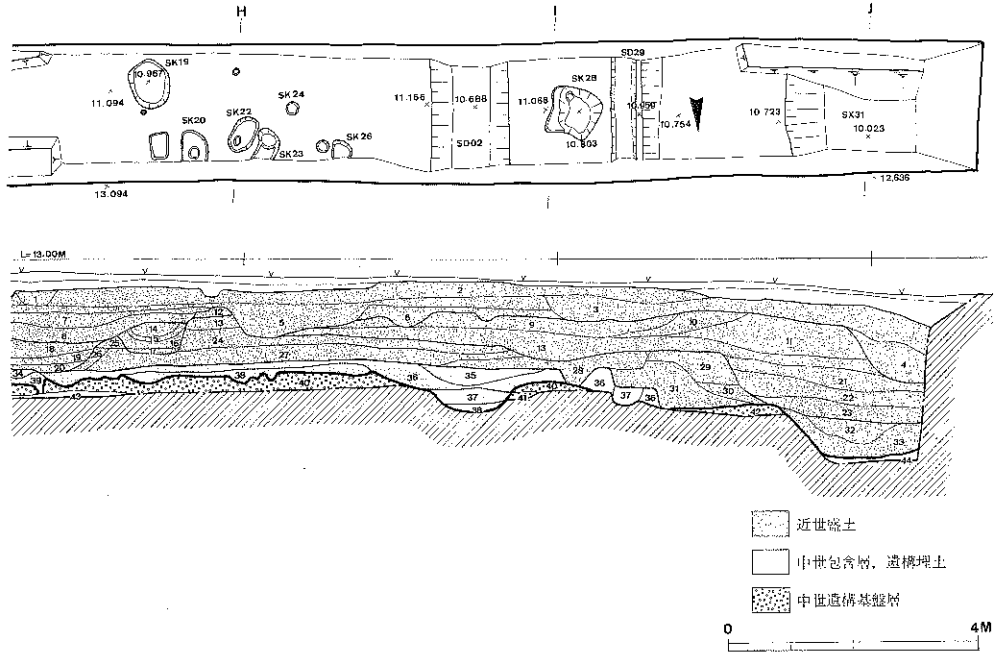
SK06・08・09・10・11 B区で検出した柱穴群。平均口径0.6m、深さ0.2～0.5m程を測る。SK10内には、15×25cmの平坦面をもつ礫が出土した。

3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要



第19図 トレンチ配置図

I. 昭和63年度発掘調査



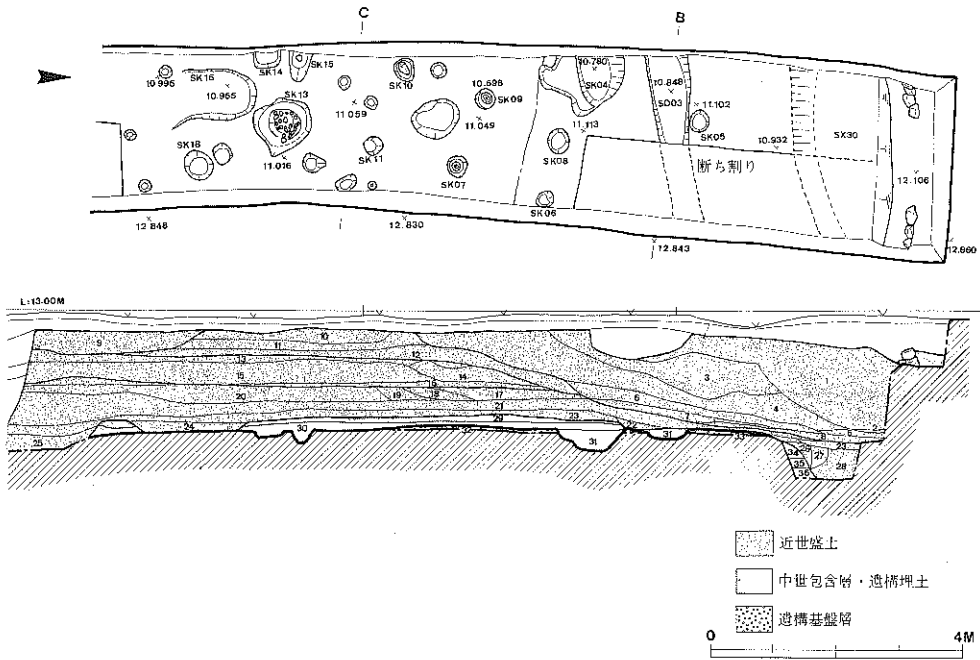
土色分類

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1. 灰白色粘土 (鉄分, 黄灰色シルト, ブロック含む) | 19. 茶褐色土 (炭, 土器片含む) |
| 2. 黒灰色土 | 20. 灰色粘質土 (炭, 暗灰色ブロック含む) |
| 3. 灰色粘土 (鉄分, 黄白色砂層ブロック含む) | 21. 黄白色砂層 |
| 4. 灰色粘土 (鉄分含む) | 22. 暗黄褐色土 |
| 5. 灰色シルト | 23. 灰白色粘土 (鉄分含む) |
| 6. 黄褐色砂層 (鉄分, 灰色シルト, ブロック含む) | 24. 灰色粘土 (炭, 土器片含む) |
| 7. 灰色シルト (鉄分含む) | 25. 黄褐色砂礫土 |
| 8. 黒灰色砂層 (鉄分含む) | 26. 暗灰色粘質土 (鉄分含む) |
| 9. 灰色土層 (鉄分, 灰色粘土ブロック含む) | 27. 灰色粘性土 (鉄分含む) |
| 10. 黄褐色シルト (鉄分, 灰色粘土ブロック含む) | 28. 暗灰色粘土 (近世陶磁器含む) |
| 11. 黄褐色シルト (暗灰色土ブロック含む) | 29. 茶褐色粘質土 (炭, 土器片含む) |
| 12. 黄褐色砂質土 (鉄分, 灰白色シルト含む) | 30. 暗茶褐色色土 (土器片含む) |
| 13. 黄褐色粘質土 | 31. 暗茶褐色土 |
| 14. 黄白色砂層 | 32. 橙褐色土 |
| 15. 黄褐色粘質土 (灰・暗灰色土ブロック含む) | 33. 黄褐色砂礫層 |
| 16. 黄色粘土 | 34. 灰褐色砂礫土 |
| 17. 黒褐色土 | 35. 灰色砂層 |
| 18. 黄灰色粘質土 | 36. 黄褐色砂礫層 (鉄分含む) |

地山

第20図 1 トレンチ実測図

3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要



土色分類

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1. 暗茶褐色粘土 | 23. 暗灰色粘質土 |
| 2. 灰色シルト (鉄分含む) | 24. 暗黄褐色砂礫土 |
| 3. 黄褐色土 | 25. 暗茶褐色土 |
| 4. 近世瓦・土器溜り | 26. 暗茶褐色土 (近世瓦溜り) |
| 5. 黄灰褐色砂質土 | 27. 黄褐色砂層と灰褐色粘質土の互層 |
| 6. 灰茶褐色土 | 28. 灰褐色砂土 |
| 7. 暗灰色粘土 (鉄分含む) | 29. 暗茶褐色土 (橙褐色土ブロック含む) |
| 8. 淡茶褐色粘質土 | 30. 暗茶褐色土 |
| 9. 黄褐色砂層 | 31. 暗茶褐色土 (橙褐色土, 茶褐色土, ブロック含む) |
| 10. 茶褐色シルト (鉄分, 灰褐色粘土ブロック含む) | 32. 暗灰色砂礫層 |
| 11. 黄茶褐色土 | 33. 暗灰色粘性土 (鉄分含む) |
| 12. 灰茶褐色土 | 34. 淡茶褐色粘質土 |
| 13. 暗茶褐色土 (炭, 土器片含む) | 35. 灰褐色粘質土 (礫含む) |
| 14. 暗茶褐色土 | 36. 茶褐色粘質土 (炭, 土器片含む) |
| 15. 焼土層 | 37. 暗茶褐色土 |
| 16. 暗褐色土 (礫含む) | 38. 暗灰褐色土 (礫含む) |
| 17. 貝層 | 39. 暗灰褐色粘質土 |
| 18. 黄褐色砂層 | 40. 黄褐色粘質土 |
| 19. 灰色粘土 (鉄分含む) | 41. 黄褐色砂質土 |
| 20. 暗茶褐色土 | 42. 橙褐色土 |
| 21. 暗茶褐色砂礫土 | 43. 黄褐色砂礫土 |
| 22. 茶褐色粘質土 (礫含む) | 44. 黄白色砂礫層 |
- } 地山

第21図 2トレンチ実測図

I. 昭和63年度発掘調査

SK07 B区で検出した柱穴、径0.35m、深さ0.15mを測る。埋土は炭・土器細片を含む灰色粘土である。SK16と共に近世期のもの。

SK13 C区で検出した不定形な2段土壇。東西・南北とも0.9m、深さ0.3m程を測る。2段目は径0.5m程で土壇壁面には、長径10cm程の礫が貼り付いている。暗茶褐色土の埋土中には炭・焼土等は見られなかったが、礫表面には煮こぼれた煤が付着している。

SK15 C区トレンチ西壁際で検出した土壇。東西検出長0.5m、南北0.3m、深さ0.2m程を測る。底部には径10cm程の礎が遺存。若干の土師皿、弥生土器片が出土した。

SX30 A区で検出した近世期の落ち込み。検出長は東西2.6m、南北1.3m、深さ0.6m程を測る。中世遺構面及び地山層を穿つ。埋土は、大きく暗灰色粘土とその土に堆積する灰白色粘土に分かれる。近世陶磁器および木製品は暗灰色粘土より出土した。

(2トレンチ)

1トレンチと同様に、トレンチ西側G～J区において安定した中世期の遺構面を検出した。検出した遺構には、土壇5、溝2、柱穴2、小ピット2と近世期の落ち込みがある。しかし、2トレンチは、トレンチ壁崩壊による流入土砂除去作業の際、少し遺構面を削平してしまったことから、今あげた遺構が本来の姿であるという確証がないことは否めない。このため、本来の遺構規模が判明できたものについては、その数値を明記したい。

SD02 H区で検出した南北溝。幅2.2m、南北検出長1.3m、深さ0.5m程を測る。埋土は4層に分層できる。上層から、灰褐色粘質土、茶褐色粘質土、暗茶褐色土、暗灰褐色土である。第2層の茶褐色粘質土は炭・土器片を含むもので、基本的には遺物包含層と同一層である。土器は第3層の暗茶褐色土からの出土である。

SK19 G区で検出した土壇。東西0.6m、南北0.8m、深さ0.1m程を測る。

SK28 I区で検出した不定形土壇。東西・南北とも1.3m、深さ0.3m程を測る。暗茶褐色土の埋土中から、弥生土器・古式土師器の甕体部片数点が出土した。

SD29 SK28西側で検出した南北溝。幅0.4m、南北検出長1.6m、深さ0.3mを測る。

SX31 I区で検出した近世期の落ち込み。東西検出長2m、南北検出長1.3m、深さ0.6mを測る。中世期遺構面と地山を穿っている。底部は黄白色砂礫層の地山である。埋土は暗灰色砂礫層と暗灰色粘性土の2層。遺物の出土は見られない。依然南北方向へと続く状況を示すが、恒的な滞水状態にあったとは思われない。しかし、本遺構上端から続くトレンチ土層断面に見られる傾斜面と暗茶褐色土の高まりは、遺物の出土が見られないことから近世期の仕事と判断したが、本来は空濠とそれに伴う土塁の一部であった可能性も否めない。

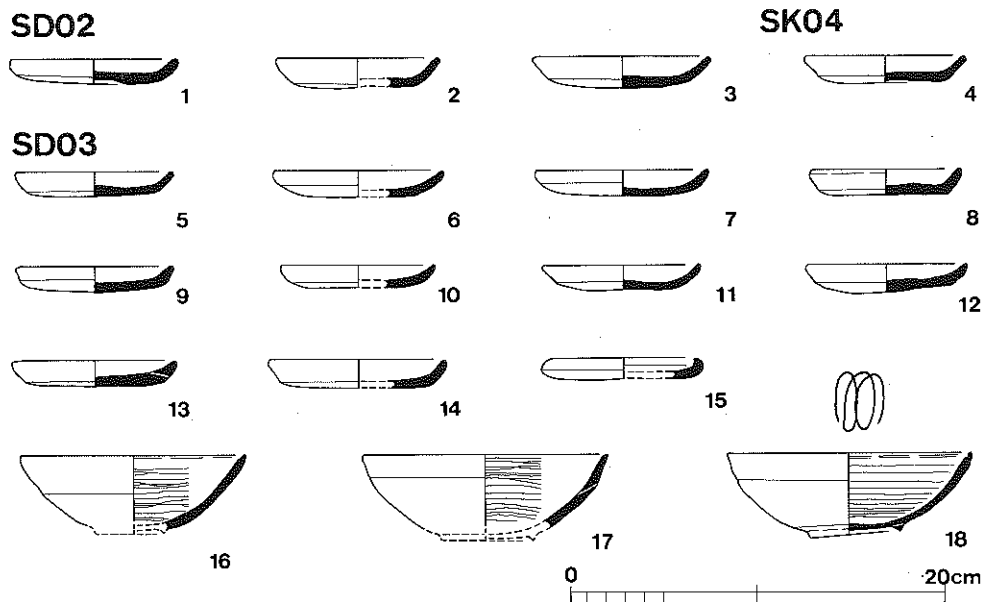
(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器土師器・瓦器・中世陶器・近世陶磁器・輸入陶磁器等の土器類のほか、少量の瓦類と木製品がある。量的にはコンテナー3箱分程であり、そのうち8割程が近世期の落ち込みおよび中世期遺構面直上より2m堆積する近世期盛土中より出土した近世陶磁器である。その特性から弥生土器・土師器は概して遺存状態はよくなく、細片のことが多い。時代的にその中心となるのは、13世紀頃の土師器皿・瓦器椀および17世紀後半頃の近世陶磁器である。以下、遺構ごとにその概要を述べることとする。なお、近世陶磁器については、整理作業が未了のため主だったものについて報告する。

(土器類)

SD02出土の土器 土師器の皿・甕と瓦器の椀がある。土師器の皿(1~3)は、平均口径9cm、器高1.6cmを測る小皿である。甕は口縁部小片で摩滅が著しい。瓦器の椀は口縁端部内面に一条の沈線を施す小片である。体部外面にはヘラミガキは見られない。

SD03出土の土器 土師器の皿、瓦器の椀がある。量的には図示したほか土師器の皿小片が30点程ある。土師器の皿には、底部から緩やかに立ち上がる体部と丸くおさめる口縁端部をもつもの(6・7)と、直線的な体部と面取り風の外傾する端部をもつもの(5・8・11・14)、そして全体に器壁が厚く体部の不明瞭なもの(9・10・12・13)が認められる。新旧関係については、6・7が形態的・法量的にやや古いタイプといえる。また、口縁部を内側に折り曲



第22図 土器実測図 (1)

I. 昭和63年度発掘調査

げる扁平なもの(15)が1点ある。瓦器の碗は平均口径12.6cmを測るもので、口縁端部内面に沈線を施すもの(18)と施さないもの(16・17)がある。両者とも、体部外面はユビオサエのままヘラミガキは認められない。

SD02、SD03および後述するSK04出土の土器の様相は、平安京左京内膳町SD345、SK118出土土器^{註2}の様相と類似する。このことから、実年代的には概ね12世紀末から13世紀前半頃のものといえる。

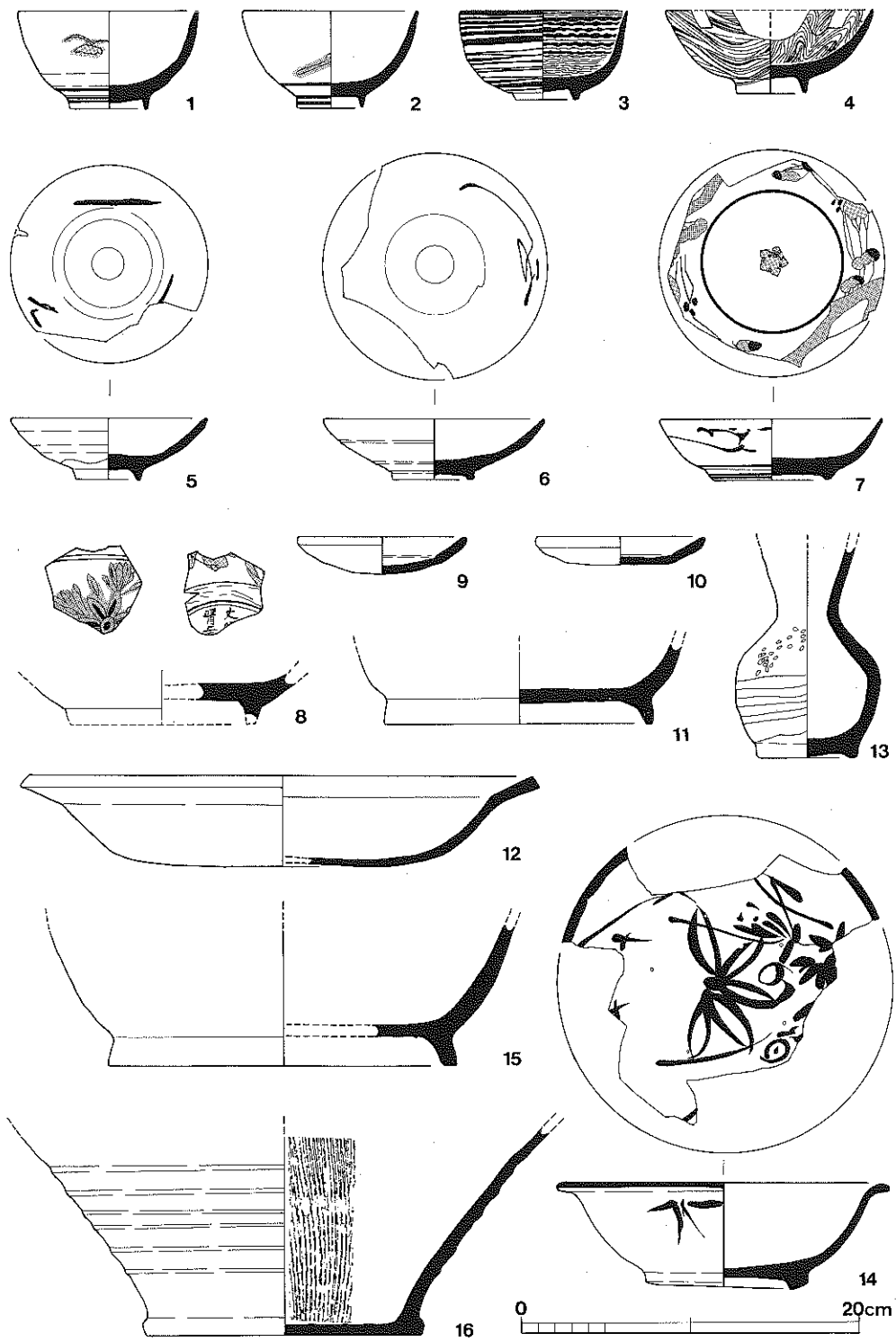
SK04出土の土器 土師器の皿・甕、弥生土器の甕が若干ある。土師器の皿(4)は、口径8.5cmを測る。甕は口縁部小片で外面にヨコナデが見られる。弥生土器も甕体部小片で全形は不明。外面はヘラケズリ痕をもつ。混入品。

SK15・SK17・SK28出土土器 いずれも若干数の弥生土器または古式土師器の甕・高杯の体部小片が出土している。全体的に摩滅が著しい小片であり全形は窺えない。混入品。

SX30出土の土器 土師器の皿・鍋、伊万里系・唐津系・丹波系等の近世陶磁器の碗・皿・壺・鉢といったものが、一括してコンテナー1箱分程出土した。土師器の皿は、平均口径10cm、器高1.9cmを測る小皿(9・10)と、平均口径5cm、器高1.2cmを測る極小皿とがある。前者は、内底面と体部の境に明瞭な沈線を施すものである。後者はミニチュアのもの。12は焙烙鍋である。浅いレンズ状の体部と外上方にのびる口縁部をもつもので、口縁端部は外傾する。器壁は概して薄い。口径29.4cm、器高5.3cmを測る。11・13は土師質の鉢である。断面長方形の高台をもつ同一形態の大・小である。底部外面を除き基本的にヨコナデを施すが、体部外面には丁寧にヘラミガキにより器壁を平滑に仕上げている。

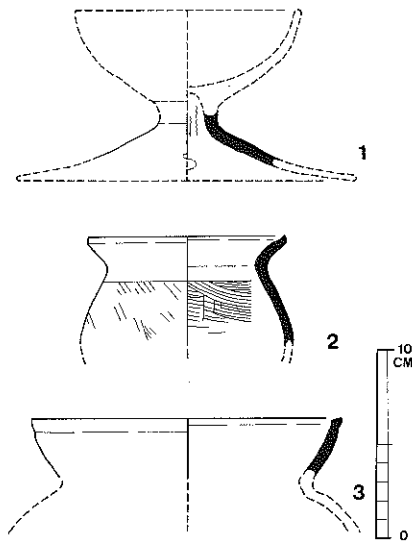
伊万里焼には染付の碗と皿および青磁・白磁の少片がある。1・2は半球形の体部をもつ所謂丸碗と呼ばれる染付の碗である。内外面に施釉したのち高台端面の釉をかき取る。染付は蔓草状の草花文。平均口径10.5cm、器高5.8cmを測る。染付の皿には、高台部からやや内湾気味にのび口縁部にいたるもの(5・6)と、内湾したのち直すぐ体部がのびる型作りのもの(7)がある。前者は、乳白色の釉を浸しつけたのち見込み部の釉をかき取る。5・6は分量違いの大・小である。後者は体部内外面に草花文を施し、見込み中央には5弁花文のスタンプ文様を施す。唐津焼には、碗と瓶がある。3は、体部が内湾しつつ口縁部にいたる碗である。全面に刷毛塗りされた白土を櫛刷毛でかき取って文様とする。所謂三島唐津と呼ばれるものである。外面は平行文、内面は細い波状文を基調とする。そののち透明釉を全面に施釉する。4は、高目の高台から内湾する体部をもつ浅形の碗である。施釉は基本的に3と同様である。白土を刷毛でかき取り体部内外面に波状文を施す。透明釉を施したのち内面見込みと高台端部の釉をかき取る。胎土は黒灰色、釉はオリーブ色を発色する。瓶(13)は所謂徳利である。断面形台形の低い高台から肩部のはった球形の体部と外上方にのびる頸部をも

3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要



第23図 土器実測図 (2)

I. 昭和63年度発掘調査



第24図 土器実測図 (3)

つものである。上半部はナデを施し、体部下半以下はヘラケズリを施す。また、肩部にはヘラ状工具による稲穂状の列点文を施す。施釉は、高台と体部最下部を除く外面全面に鉄釉を施す。

輸入陶磁器では、青花の皿の高台部片(8)がある。底部内面見込みには付付圏線と宝相華文を、体部外面に草花文風の文様を描く。底部外面に「大明嘉靖年製」銘。全面に施釉。

これらの他に、丹波焼・備前焼の播鉢等がある。

以上の近世期落ち込みSX30出土土器の様相は、大坂城跡の第三遺構面および第3層出土土器^{註3}の様相に類似している。このことから、これら土器の実年代は概ね17世紀後半頃に比定できる。

遺物包含層出土の土器 前述のとおり、遺物包含層には、中世期のものと、近世期のものとに分けられる。

中世期包含層出土のものは、遺構面直上の暗褐色粘性土より出土したもので、基本的には直掬出土のものと同様相は変わらない。土師器の皿・瓦器の椀のほか、弥生土器・古式土師器小片が見られる。ここでは、後者の中で比較的遺存状況の良いものについて説明を加える。1は庄内式の高杯脚部片である。椀形の杯部と裾広がり脚部をもつ小型高杯と思われる。摩滅は著しく調整は不明。本資料はSK13出土品。2は弥生土器の小型甕である。くの字の口縁部をもち口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外はヨコナデ、体部内外面はハケを施す。口径10.2cmを測る。3は布留式の甕口縁部片である。口縁端部が内傾するもの。内外面ともヨコナデ、外面には煤の付着が認められる。口径16.3cmを測る。

近世期盛土出土のものは、層厚的には2次堆積のもの・整地層のもの・攪乱土層のもの^{註3}が存在するわけであるが、今回は調査の手順上荒掘段階で一括扱いとした。そのため近代のものも含まれておりここでは割愛することとする。

(その他の遺物)

以上の土器類の他には、若干の木製品・瓦類がある。木製品は1トレンチ近世落ち込み灰色粘土出土のもの。長さ21cm、径5mm程の箸数本と、径14cm程の曲物の底板部片がある。また小片ながら、漆器片も数点出土している。黒漆を塗ったのち片面のみ赤漆を施す。

瓦類には、丸瓦・平瓦・棧瓦等がある。すべて近世期のものである。

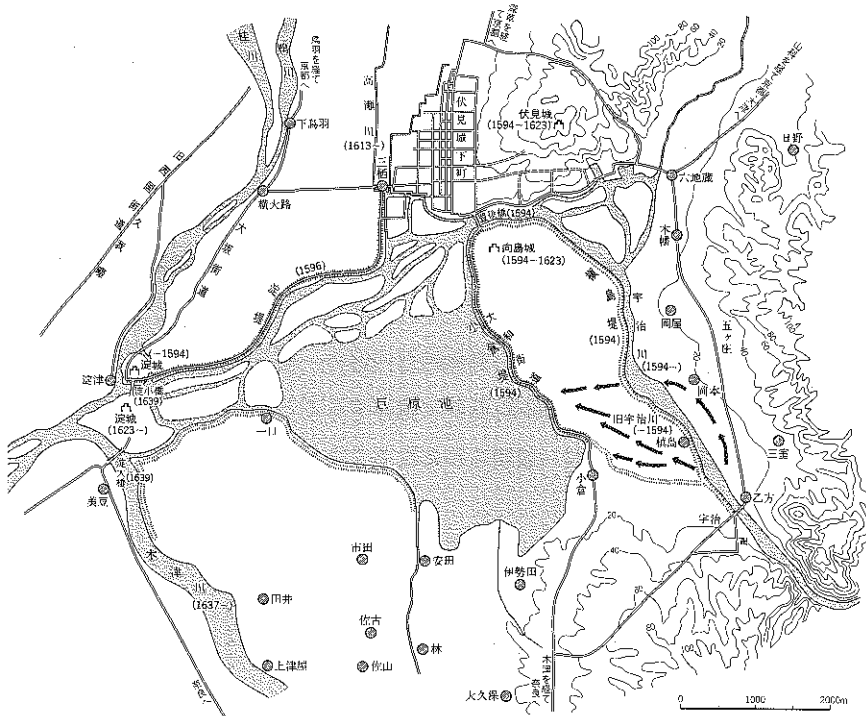
(4) ま と め

以上、調査の概要を述べてきた。ここでは、最後に若干の説明を加えおわりとしたい。

(環濠集落)

中世の環濠集落は、当時の人々の自己防衛の表われであった。旧巨椋池の南岸の地域、現在の久世郡久御山町の佐古・佐山の集落は、木津川と巨椋池にはさまれた標高10m程の低湿地に位置し、環濠集落の往時の姿を今に残している。それに対して、小倉の集落は本来のこのような環濠集落の形態、つまり集落を囲む濠・水路と土塁や周囲の田畑より一段高い立地などから見れば、厳密な意味での環濠集落とはいえないかもしれない。しかし、巨椋池へ岬状に突出した台地上に位置する小倉の集落は、丘陵に続く集落の南側を水路によって締切れば、まさに環濠集落の形態とその機能を果す立地環境にあるといえる。^{註4}

調査では明確な環濠集落に関連する遺構は認められなかったが、少なくとも、鎌倉時代以降、実年代では13世紀頃より当地において集落が成立していたことが判明した。小倉の集落の場合、他の環濠集落と違い、巨椋池に生計の一部を依存する漁村としての性質をもつことが指摘され、かつ集落内に秀吉によって大和街道が施設されたため、近世以降、急速に集落の形態が変化すると推察できる。



第25図 近世初頭の巨椋池と幹線道路

I. 昭和63年度発掘調査

(太閤堤築堤と盛土)

現在、宇治市西部の大部分を占める巨椋池干拓地は、昭和16年の巨椋池干拓によって生まれた水田地帯である。干拓以前にはそこには、周囲16km、面積794haという巨大な淡水湖である巨椋池が存在していた。山城盆地中央部に位置し、宇治川・木津川・桂川の三河川が合流する一大遊水地帯を形成していた。現在、宇治市域を縦断するように北流する宇治川は、かつては丘陵部から出ると直接巨椋池に注いでいた。小倉の集落の東側はこの宇治川の旧流路にあたる。現在の宇治川の流路の変更は、豊臣秀吉の伏見城築城時の太閤堤築堤による。彼は、槇島堤を築き宇治川を伏見城の外堀として機能をもたせると同時に、小倉堤を築き大和街道を新設して旧来の巨椋池水上ルートと宇治川東岸の大和大路を否定し、巨椋池周辺の交通機能を掌握しようとした。このような治水工事による改修後も、度々巨椋池周辺地域は甚大な被害を受けてきた。17世紀以来、記録に残る大洪水だけでも実に22回に達している。調査地で認められた層厚2m程におよぶ近世期の盛土及び流入土は、まさに宇治川付け替えによって生まれた新しい水との戦いの結果であろう。

(今後の課題)

今回検出した中世期の遺構面は、標高11m程である。干拓前の巨椋池の湖底の標高が約10m、水深が1.4m程であったことからすれば、巨椋池の水位が絶えず変化していたものであったとしても、干拓直前の地形から遺跡の有無・遺存状況を判断することは危険であるといわざるを得ない。

また、小倉環濠集落遺跡内及びその南側では、弥生中期から古墳前期にかけての土器や石器が出土しており、ここが弥生時代以降、人々の生活の場として利用されてきたことが窺える。今回の調査でも中世の遺物包含層内から若干量の弥生後期から古墳前期の土器が出土しており、今後、当該地域での発掘調査においては、これらの時代の遺構検出も大きな課題であるといえよう。

今回の調査は、環濠集落として当遺跡の具体的な内容の一端を確認するとともに、さらに安定した遺構が標高11m前後でも比較的良好に遺存することが判明した。今後の周辺地域の調査により、当地域周辺の様相が一層明らかになることに期待したい。

3. 小倉環濠集落跡発掘調査概要

(註)

- 註 1. 「神楽田遺跡発掘調査概報」「巨椋神社東方遺跡発掘調査概報」「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報」第1集、宇治市教育委員会、昭和57年。
- 註 2. 「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報」1980、第3分冊、京都府教育委員会、昭和55年。
- 註 3. 『大坂城跡Ⅲ』財団法人、大阪市文化財協会、昭和63年。
- 註 4. 『宇治市史』第2巻、昭和49年。

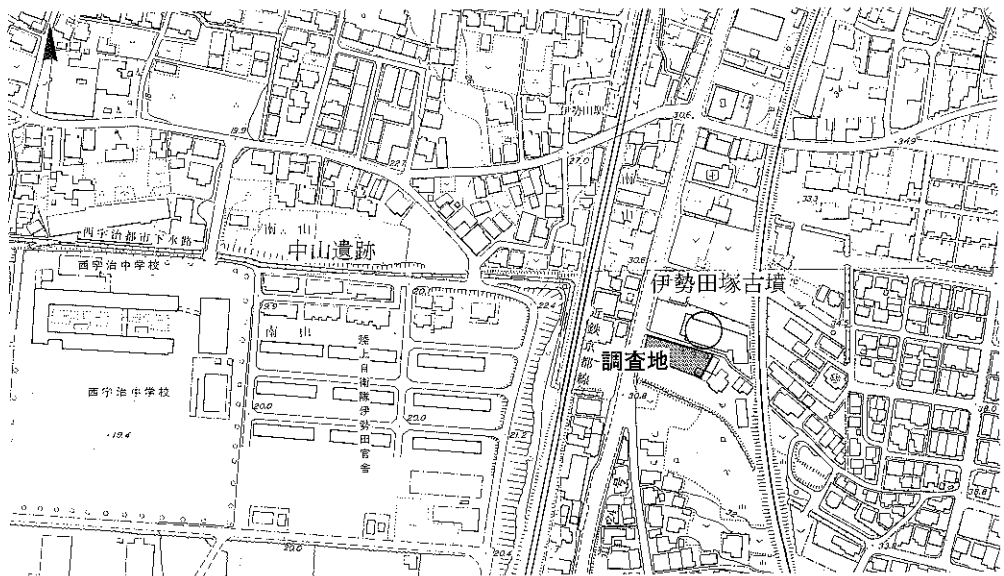
4. 伊勢田塚古墳隣接地発掘調査概要

(1) はじめに

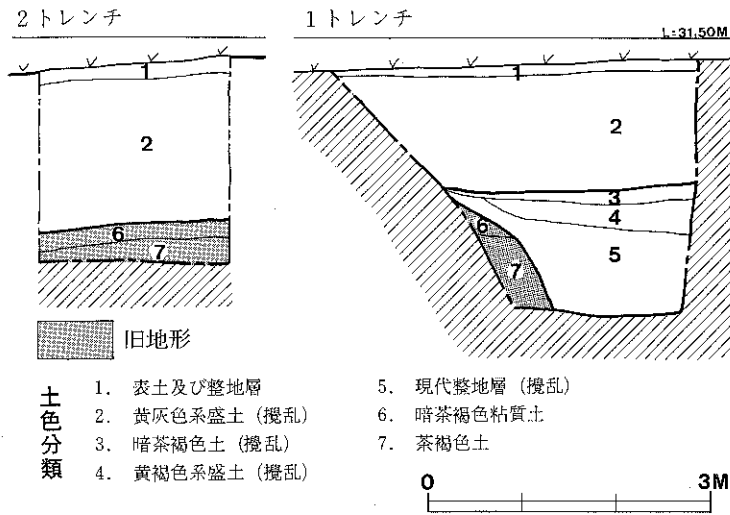
今回の調査は、宇治市広野町桐生谷90-1番地において、岩井徳次郎氏による集合住宅建設に伴って実施した発掘調査である。現地調査は昭和63年7月18日から同年7月22日までである。調査面積は50m²である。

当該開発地は、国道24号線と旧奈良街道の交わる標高30m程の台地上に位置する伊勢田塚古墳と北面する隣接地である。現在の土地利用状況は空閑地となっている。

伊勢田塚古墳は、以前よりお亀塚などと呼ばれ江戸時代の古墳としての伝承をもっていたが、昭和47年の伊勢田塚調査会による発掘調査によって、概ね7世紀初頭頃の古墳であることが確認された。調査では、墳丘自体は自然流出等のためその形状・規模は確認できなかったものの、土師質陶棺を直葬する内部主体部1基を検出している。長さ2.9m、幅1.6mの2段墓壇の底部の地山を削り出して棺台を作り、その上に長さ1.5m、幅0.5m、高さ0.6m程の陶棺を据えたものである。陶棺は合口式の四注式家形陶棺で、当初より棺底をもたない特殊なものである。外面全体には亀甲形陶棺にみられるような凸帯が格子状に貼付けられている。副葬品については棺の内外とも出土はみられなかった。なお、本陶棺は現在、宇治市指定有形文化財となっている。



第26図 調査地位置図(1:5000)



第27図 土層断面実測図

(2) 調査の概要

前述のとおり、古墳の範囲については不明であるものの、当該開発地は伊勢田塚古墳の南側の一部に含まれる可能性が高いことから、本調査ではその確認を主眼として実施した。

調査にあたっては、調査地の北側に幅2m、長さ20mの東西トレンチを設定した。掘削にあたっては、事前に盛土の堆積が認められていたため、旧地形直上まで機械による土砂除去作業を行った。しかし、一部で表土直下でコンクリート建物基礎を認める等、当初の予想以上に後世の攪乱・盛土が著しいことから、最終的には3個所のグリットによって遺構の遺存状況と土層観察を窺うこととした。

調査地で認められた層序は、上層より、層厚0.2mの表土・整地層、層厚1.5mの黄灰色系盛土、そして層厚1.1mの暗茶褐色粘質土と茶褐色土の旧地形、茶褐色砂礫土の地山である。旧地形の両層には、遺構・遺物は認められない。また、1トレンチ東端では旧地形を切り込む落ち込み部分が認められたが、その埋土は黄灰色系盛土と現代整地土であった。

以上、今回の調査では、旧地形と思われる地盤を認めたものの遺構・遺物は認められず、その旧地形も現代にいくらかの削平を受けている可能性が判明した。つまり、本古墳関連遺構は認められなかったこととなる。しかしながら、前述のとおり本古墳の範囲は不明であるものの、今回検出した旧地形が標高29.5m程と陶棺検出面に近いことから、厚い盛土下には比較的良好に旧地形が遺存する可能性が考えられることや、調査地の周囲では陶棺片の出土が伝えられることから、依然、今後も一層綿密な調査が必要であると考えられる。

註 『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』伊勢田塚調査会、昭和48年。

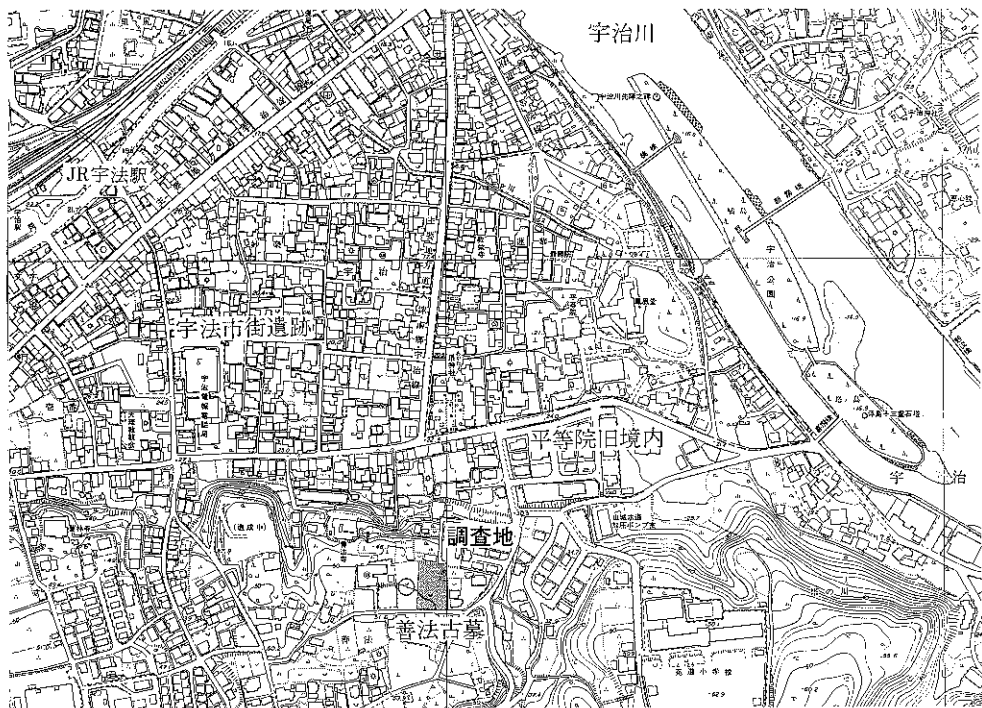
5. 善法古墓発掘調査概要

(1) はじめに

今回の調査は、宇治善法122-71他において、宇治市道改良工事に伴い発掘調査を実施したものである。調査面積は80m²であり、調査期間は昭和63年8月1日から8月3日までである。

善法付近は、現在の宇治市街地より一段高くなった台地状地形となっており、古くより耕作等に伴い石仏や一石五輪塔がしばしば発見されているところである。太平洋戦争後間もない頃、今回の市道建設予定地西側において、偶然、平安時代末期の和鏡や輸入磁器が一括で発見されており、この辺りが墳墓地として平安時代頃から利用され始めたらしいことを窺せる。

調査は、市道予定地のうち、平安時代末期の遺物が発見された畑地に隣接する部分で実施をした。

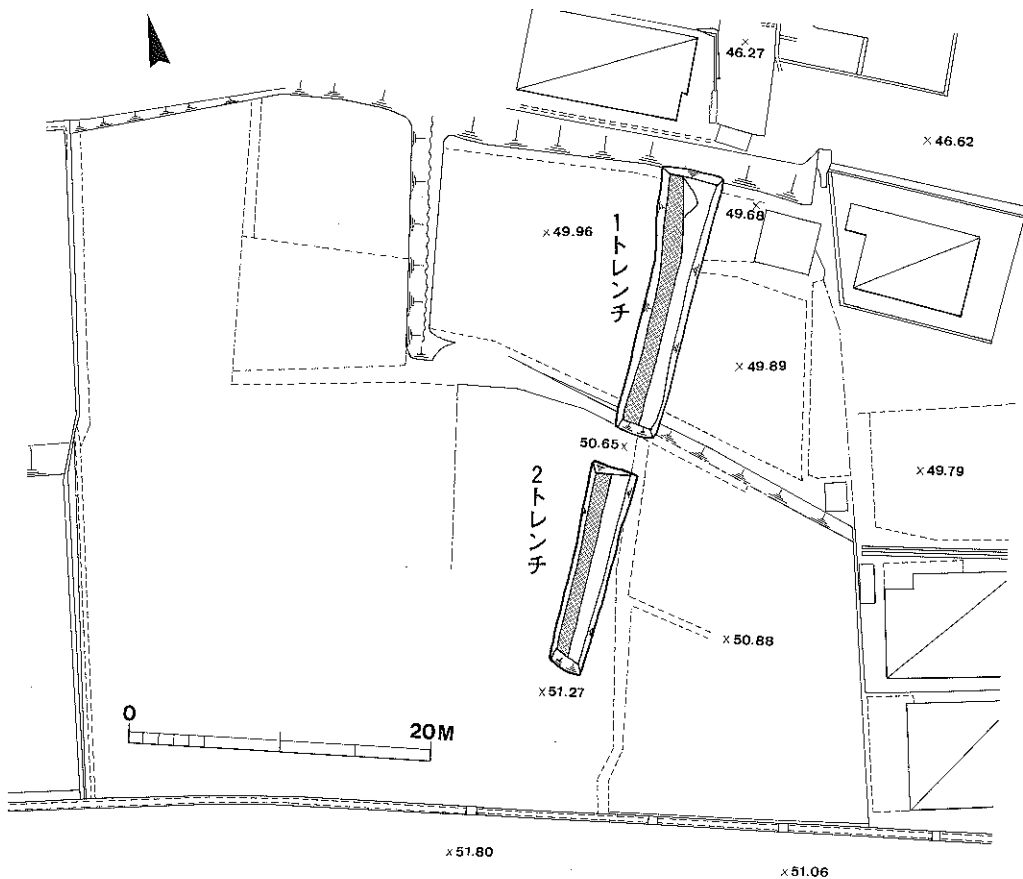


第28図 調査地位置図(1:7500)

(2) 調査の概要

調査は、市道建設予定地内に2本の南北トレンチを設定し、実施することとした。パワーショベルを使用し、耕作土を20~30cm程除去すると、直ちに赤褐色の地山層が検出され、この層上において遺構の有無を確認した。所々において、黒褐色の土を埋土とする不定形土壌状のものを検出したが、いずれも現代攪乱墳と判断でき、古墓に関する遺構は全く発見できなかった。したがって、トレンチ西壁沿いで土層の断ち割りを実施し、記録を作成して調査を終了することとした。

遺物については、耕作土中より「寛永通宝」1枚と若干の近世陶器片を認めたにすぎなかった。



第29図 トレンチ配置図

6. 赤塚遺跡発掘調査概要

(1) はじめに

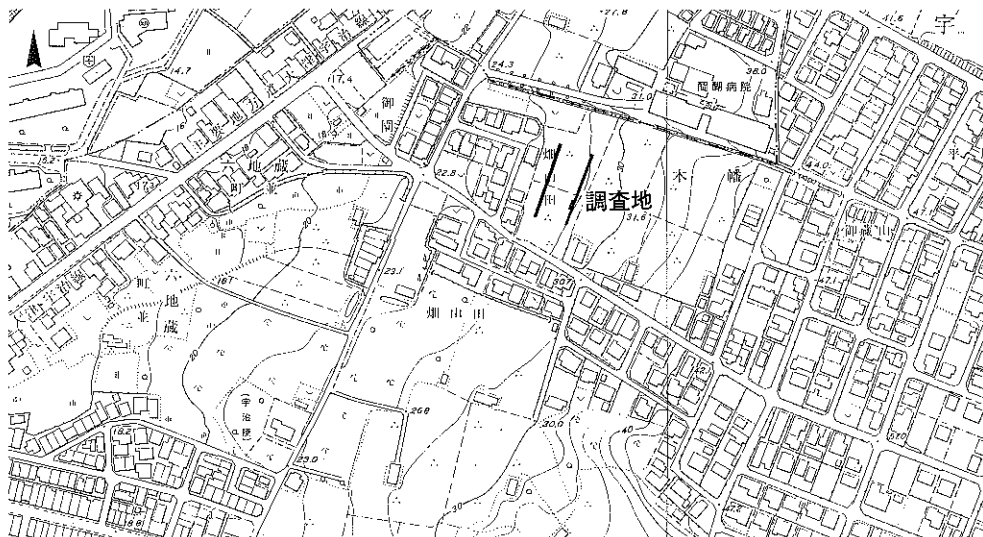
今回の調査は、木幡畑山田28他において、株式会社ビーバーハウスが計画した宅地開発に伴い実施したものである。調査面積は100m²で、調査期間は昭和63年8月11日から8月20日までである。

赤塚遺跡は、御蔵山西斜面部の木幡赤塚から畑山田一带に広がる遺物散布地で、過去に須恵器片・瓦器片等が採集されている。周辺の主要遺跡としては、現在、宮内庁管理となっている赤塚古墳や御蔵山古墳群を始め藤原道長建立の浄妙寺跡がある。

赤塚遺跡については、過去に調査例が無く、かつ、今回の宅地開発予定地については、遺物散布が集中する地区よりやや北に離れているため、まずは試掘調査を実施し、状況を確認することとした。

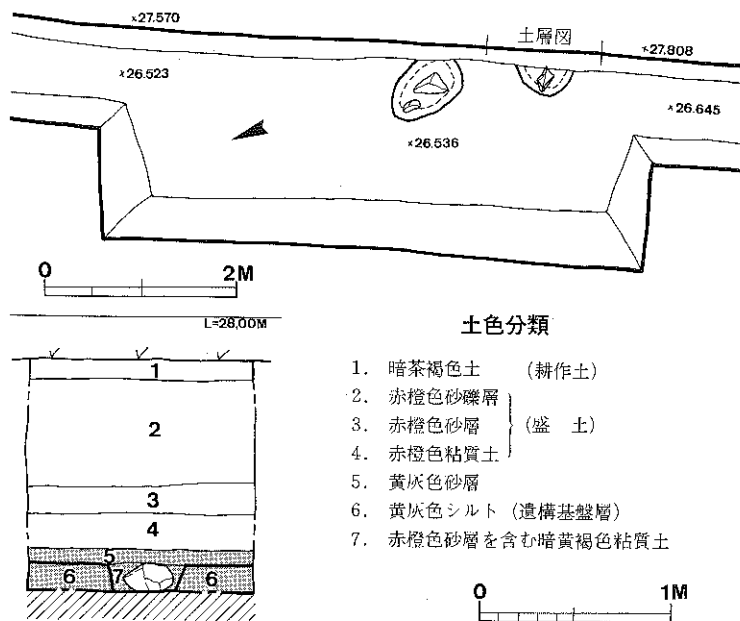
(2) 調査の概要

調査は、開発予定地内の緩斜面部分に2本の試掘トレンチを設定し、状況を把握することとした。西側に設定したトレンチを第1トレンチとし、東側に設定したトレンチを第2トレンチとする。ともに南北50m、東西1mの幅である。



第30図 調査地位置図(1:5000)

6. 赤塚遺跡発掘調査概要



第31図 第2トレンチ柱跡実測図

調査は、パワーショベルを使用し、表土等を除去することから始めた。土層の状況は、層厚20cm程の現茶畑の耕作土下に80~100cm程の盛土層があり、その下に黄灰色シルト層の地山が認められた。盛土は、近世以降のものであると判断され、地山上において遺構の検出を行うこととした。

地山面においては、各トレンチの所々で不定形土壌が認められたが、遺物が皆無であり、所属時期は不明である。また、第2トレンチ南部で、直径30cm程の河原石を根石とする柱跡2個所を発見したが、時期は確定できなかった。

遺物は、盛土中から土師器小片が若干出土したに留まる。

以上のような試掘結果であったため、当地は遺跡中心部より北へ離れた地点であると判断し、調査を終了することとした。

7. 金草原遺跡(11番地)発掘調査概要

(1) はじめに

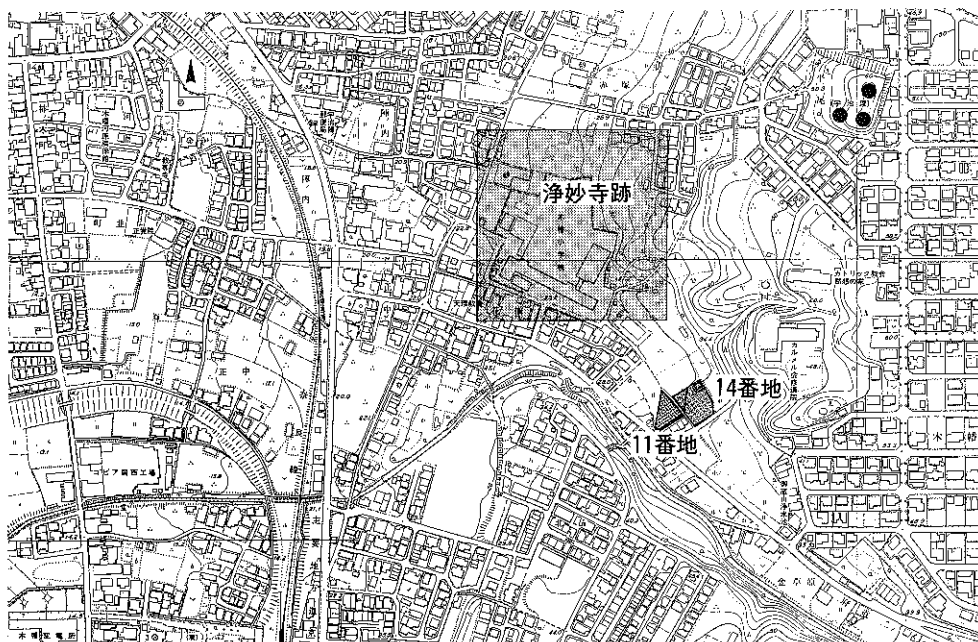
今回の調査は、木幡金草原11において、明和開発株式会社が計画した宅地開発に伴い実施したものである。調査面積は50m²で、調査期間は昭和63年9月9日より9月14日までである。

金草原遺跡は、過去に越州窯青磁水注(重要文化財)が出土したと伝えるところであり、金草原の字名は、藤原道長建立の浄妙寺の梵鐘を鑄造した時に多量にでた銅滓の投棄場所の「カナクソハラ」に由来すると伝えられている。

(2) 調査の概要

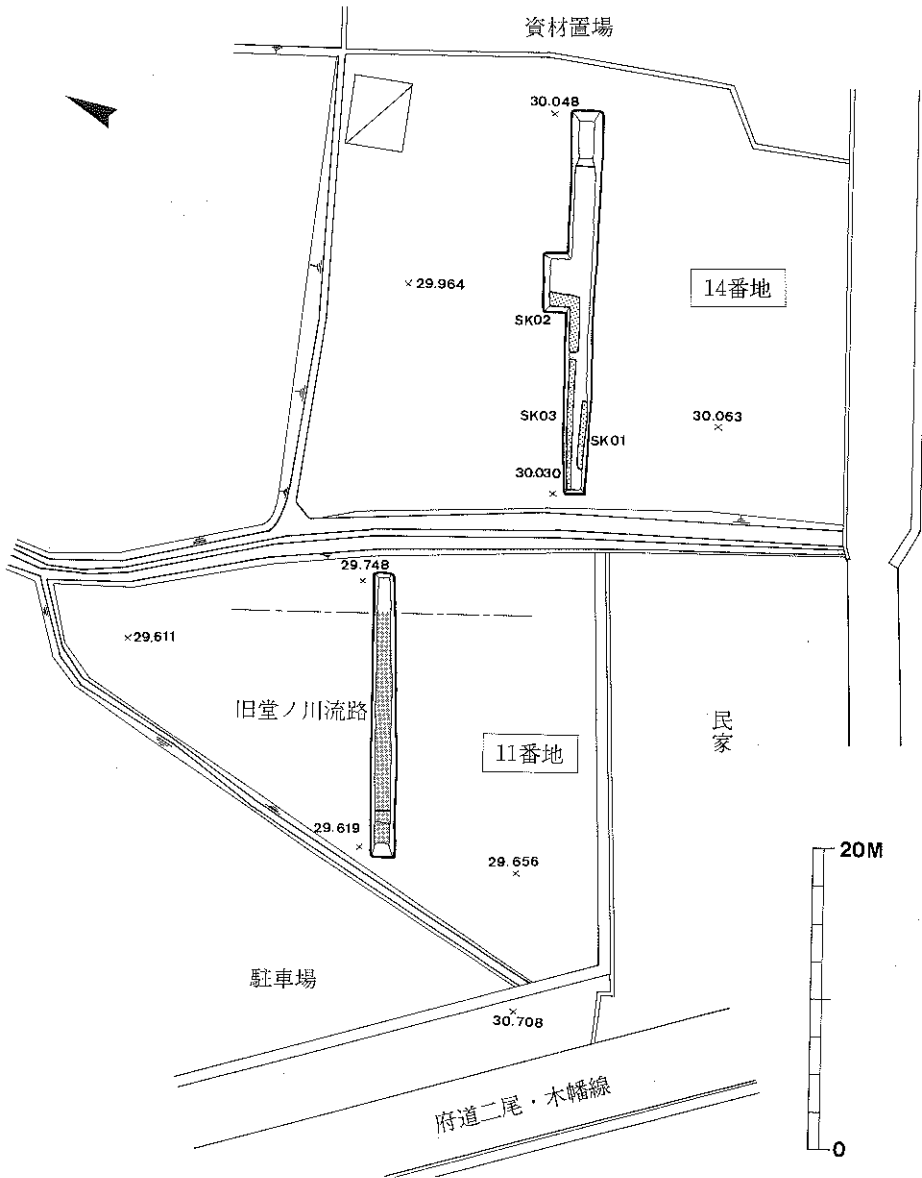
調査は、開発予定地内に南北トレンチを設定し、実施することとした。

表土をパワーショベルで除去したところ、トレンチ全面に河川堆積の砂層が検出され、さらにその砂層を50cm程除去したところ、トレンチ北端から2.6m南の地点で、旧河川の北岸を検出した。トレンチ南端部分で河川堆積砂層を地表面から2.5m掘り下げたが河川底は検出できず、調査の安全のため、これ以上の掘り下げを断念した。



第32図 調査地位置と周辺主要遺跡(1:7500)

7. 金草原遺跡(11番地)発掘調査概要



第33図 トレンチ配置図

この検出した旧河川は、現在も府道の南側を西へ向って流れる堂ノ川の旧流路と判断できる。堂ノ川旧流路は、昭和42年の浄妙寺跡発掘調査において三昧堂跡の南側でも検出されており、かつては、現流路より北側を流れていたことが理解されている。

今回検出した旧流路埋土内からは遺物の出土がなく、流路変更の時期については明確とならなかった。

8. 金草原遺跡(14番地)発掘調査概要

(1) はじめに

今回の調査は、木幡金草原14番地において、嵯峨野住宅株式会社が計画した資材置場造成に伴い実施した。調査面積は50m²で、調査期間は昭和63年9月9日から9月14日までである。

調査地は、金草原11番地の北隣りにあたり、11番地の調査と併行して実施した。

(2) 調査の概要

調査は、開発予定地内に東西トレンチを設定し、パワーショベルを使用して遺構面まで土砂を除去した。遺構は、地表下60cm程の地山面上で検出できた。検出した遺構は以下のとおりである。

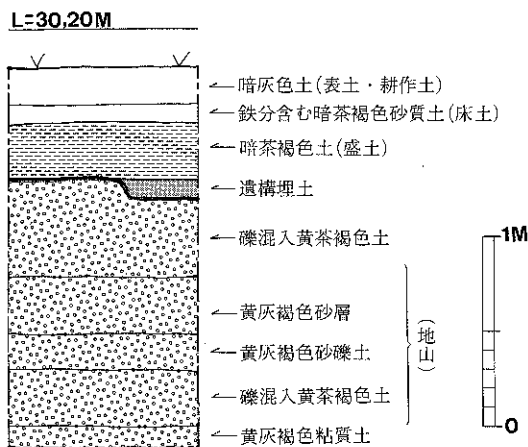
(SK01) トレンチ南壁沿いで検出した東西5m程、南北0.5m以上の土壌。埋土に拳大の礫を含む。遺物なし。

(SK02) トレンチ北壁沿いで検出した東西4m程、南北2m以上の土壌。埋土中に近世陶器片を含む。

(SK03) トレンチ北壁沿いで検出した東西7.5m程、南北0.5m以上の土壌。埋土に近世陶器片を含む。

出土遺物は、上記遺構埋土より出土したもの他に、盛土中より黒色土器・土師器片が少量出土しているが、いずれも全形を窺うことはできない。

以上のように、明確な遺構・遺物が検出できなかったため、トレンチ東端部で土層の断ち割り調査を行い、調査を終了することとした。



第34図 土層略図

9. 寺界道遺跡(野添42番地)発掘調査概要

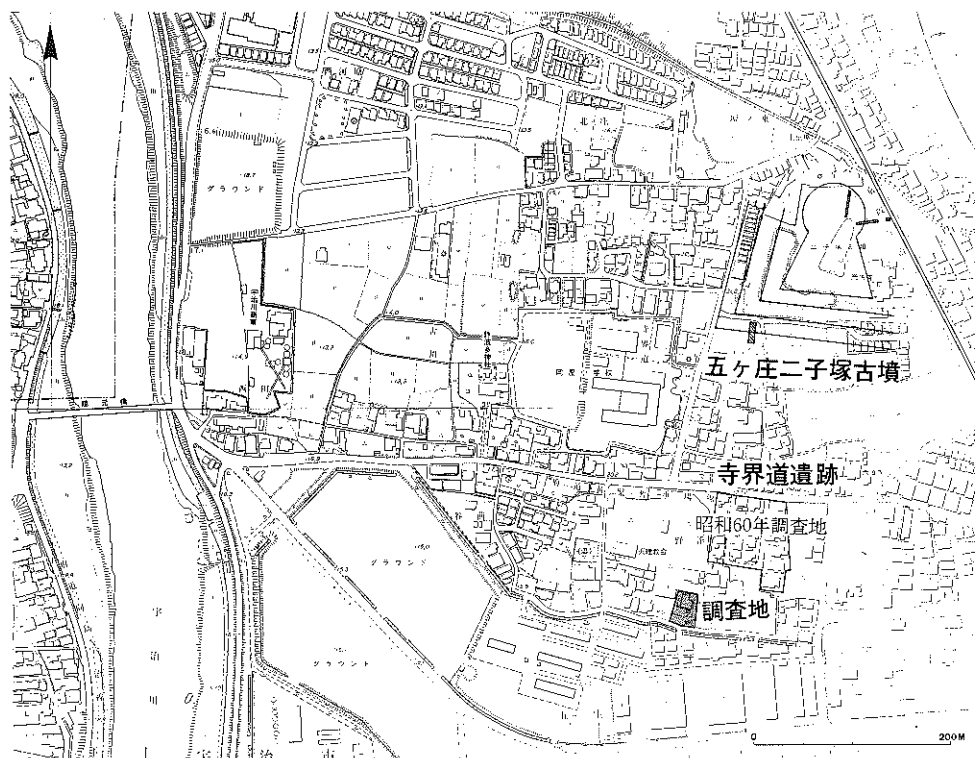
(1) はじめに

今回の調査は、五ヶ庄野添42番地において計画された宅地開発に伴い実施した。調査面積は75m²で、調査期間は昭和63年9月19日から9月24日までである。調査にあたっては、土地所有者の曾谷昭夫氏のご協力をえた。

寺界道遺跡は五ヶ庄寺界道・大林・野添一帯に広がる縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡で、昭和60年の市・府営住宅建替に伴う調査では縄文時代晩期の貯蔵穴を始め、古墳時代から平安時代にかけての住居跡多数を検出している。今回の調査地は、昭和60年調査地の南西50m地点にあたる。

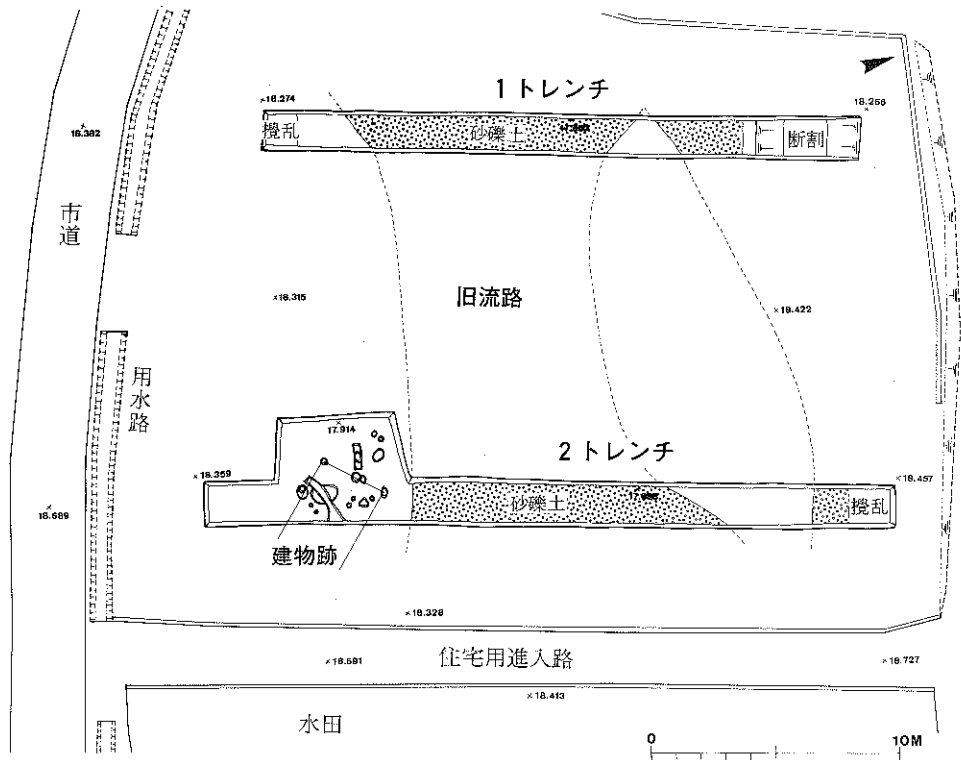
(2) 調査の概要

調査は、開発予定地内に南北トレンチを2箇所設定し実施することとした。西側のトレン



第35図 調査地位置図

I. 昭和63年度発掘調査



第36図 トレンチ配置図

チを1トレンチ、東を2トレンチとする。

遺構は、表土及び旧耕作土を40cm程除去すると地山面上で直ちに検出できた。検出遺構は1・2トレンチを横切り西へ流下する旧流路と、2トレンチ南部での柱穴及び掘立柱建物である。

旧流路は、幅8～10m、深さ30cm程の浅い不定形なもので、茶褐色砂礫土を埋土する。掘立柱建物は、旧流路南側で1棟検出し、2間×2間以上の建物である。柱穴掘方は円形で、直径30cm程を測る。

遺物は、遺構内からはほとんど出土せず、表土及び耕作土中から須恵器の甕体部片が数点出土した。

遺物が少ないため遺構の年代を決め難いが、状況的には奈良時代頃のものと思われる。

Ⅱ. 昭和63年度立会調査

Ⅱ. 昭和63年度立会調査

昭和63年度立会調査概要

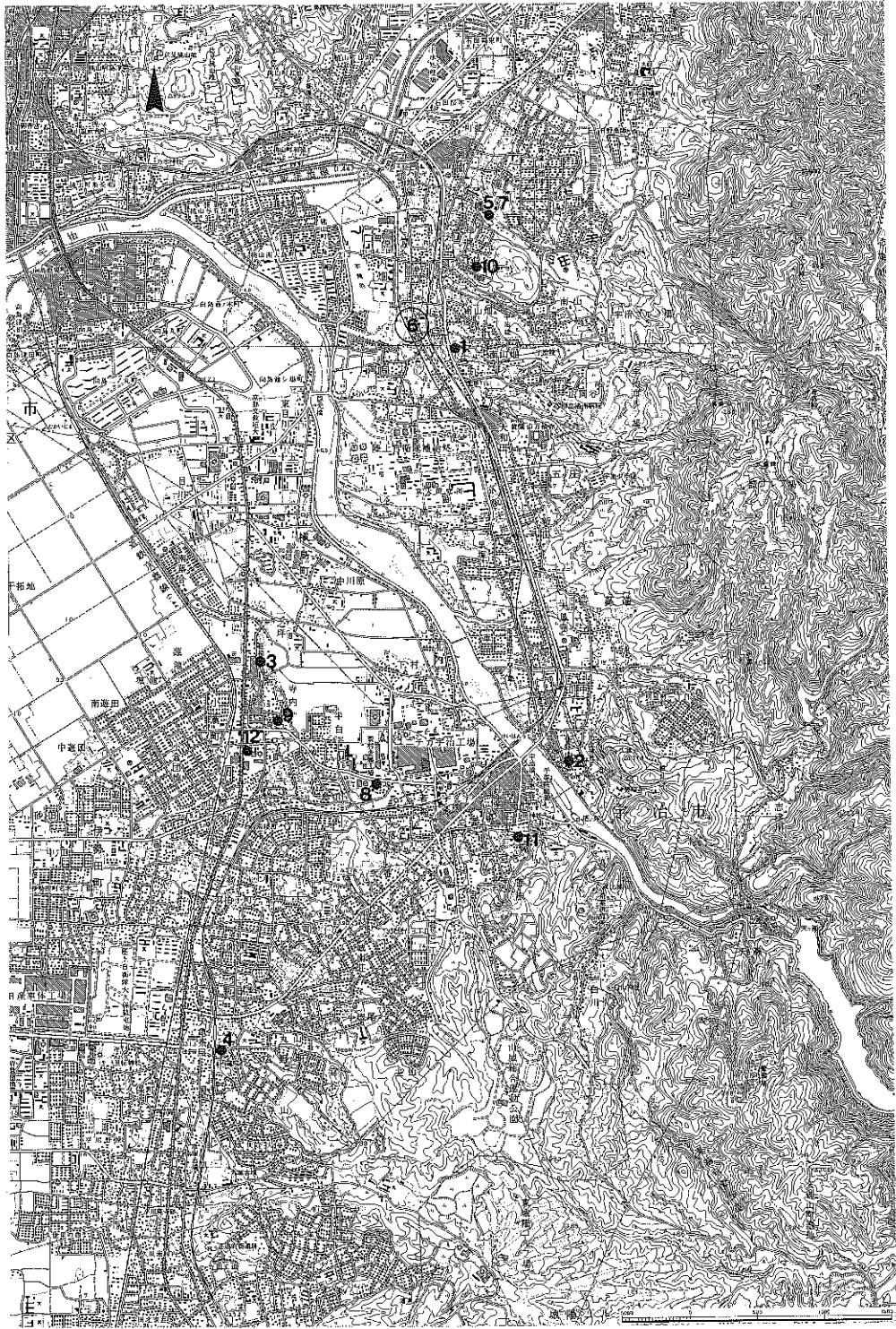
昭和63年度において、開発に伴い実施した埋蔵文化財立会調査は下記の12件である。

立会調査は、開発面積が小規模な場合や現状変更が軽微で遺跡への影響が少ない場合において主に実施している。立会調査においては、工事にあたり職員が立ち会い、遺構・遺物の確認を行う工事立会と、工事直前に小規模な試し掘りをパワーショベルにて行う試掘とを併用している。

表 1. 昭和63年度立会調査一覧表

番号	対象遺跡	地番	工事内容	対応	
1	木幡古墳群	木幡南端37	墓地造成	試掘	表土下に地山。須恵器片・埴輪片採集。
2	宇治市街遺跡	宇治又振22	住宅建築	工事立会	遺構・遺物なし。
3	巨椋神社東遺跡	小倉町寺内23-1	住宅建築	工事立会	遺構・遺物なし。
4	広野廃寺	広野町東裏128-1	住宅建築	試掘	表土下60cmで土師器片採集。
5	金草原遺跡	木幡金草原12	下水道施設	工事立会	遺構・遺物なし。
6	西浦遺跡	木幡中村地内	下水道試掘	工事立会	遺構・遺物なし。
7	金草原遺跡	木幡金草原12他	道路拡張	工事立会	遺構・遺物なし。
8	矢落遺跡	宇治樋ノ尻106-1	パチンコ店建築	試掘	地表下1mで堆積層。
9	小倉環濠集落	小倉町天王8	住宅建築	工事立会	遺構・遺物なし。
10	松殿跡	木幡松尾47-1	集会所建築	工事立会	遺構・遺物なし。
11	善法古墓	宇治善法122-69	公園建設	工事立会	遺構・遺物なし。
12	神楽田遺跡	小倉町神楽田21-5	建物建築	試掘	地表下2mまで攪乱。

※番号は第37図の番号と同じ。



第37図 昭和63年度立会調査地位置図

序

宇治市教育委員会では、昭和62年度より文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護しなければならない遺跡に対して、計画的に発掘調査を行い、その保護・保存に必要な資料の充実を図ってゆくこととなりました。

本年度は、その2年度目であり、昨年につき市内最大の前方後円墳である二子塚古墳の発掘調査と基礎資料となる地形測量とを実施しました。

今回の発掘調査では、昨年その一部を発見しました石室の基礎部の範囲や具体的な構造を確認をし、かつて存在した石室の復元に大きな手がかりを得ることができました。

本書は、この発掘調査成果をまとめたものです。本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史を知る機会となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方を始め、調査にあたりご指導を賜った関係機関ならびに各位、そして調査に従事していただいた方々に対して心よりお礼を申し上げます。

平成元年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

- 1、本書は、昭和63年度宇治遺跡群発掘調査事業として実施した五ヶ庄二子塚古墳の昭和63年度の発掘調査概要報告書である。
- 2、本書が収録する遺跡の概要は次のとおりである。

名 称	種 類	時 代	所 在 地	調 査 期 間
五ヶ庄二子塚古墳	前方後円墳	古墳時代後期	宇治市五ヶ庄大林	昭和63年11月～ 平成元年3月

- 3、本事業費は5,000,000円であり、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府から文化財緊急整備費補助金としてその1/4を得た。
- 4、本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課 主事	杉本宏
	同	嘱託	猿向敏一
調査事務局	同	参事	頼成綾子
	同	社会教育課 課長	小山豊嗣
	同	社会教育課文化係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	小西弘子
	同	社会教育課 主事	梅田正人

- 5、本発掘調査実施にあたっては、下記の方々よりご教示を得た。

京都府教育委員会、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府立山城郷土資料館、万福寺文華殿、宇治市歴史資料館、中谷雅治・奥村清一郎(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、平良泰久(京都府教育委員会)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)、和田晴吾(立命館大学)、中島正(山城町教育委員会)、〔順不同、敬称略〕。

- 6、本発掘調査事業の参加者は下記のとおりである。

調査補助員……………内田貴則
 調査整理員……………梅田恵子、大前朋恵、岡本真由美、志村みどり、山岡万里子、堀美津代
 調査作業員……………稲木富三郎、小川七郎、小山光男、沢井 勇、高山一夫

- 7、調査を実施するについては、土地所有者である西方寺のご理解をいただくとともに、住職の藤原了孝氏を始め総代の河村信雄・太田 勇・関 健治・岸村 栄の各氏にはご協力を賜わった。

8、本書収録の写真は、主に猿向敏一と内田貴則が撮影をした。

9、本書の執筆分担は下記のとおりである。

杉 本 宏……1・2・3・6各章

猿 向 敏 一……4・5各章

10、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行い、実務を杉本宏が主担当し猿向敏一がこれを助けた。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 調査の経過	9
4. 遺構	11
5. 遺物	23
6. まとめ	27

挿図目次

第1図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の主要遺跡(1:50,000)	2
第2図 五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形	3
第3図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図	4
第4図 大正年間出土の埴輪	5
第5図 五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図	6
第6図 外濠出土の須恵器	7
第7図 「万福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳	8
第8図 昭和62・63年度トレンチ配置図	10
第9図 墳丘及び検出遺構全図	10—11
第10図 62—1 トレンチ実測図	13
第11図 63—1 トレンチ実測図	14
第12図 63—1 トレンチ断面実測図	15
第13図 63—2 トレンチ実測図	17
第14図 63—2 トレンチ断面実測図	18
第15図 基礎礫群実測図	18—19
第16図 墳丘盛土の土色検出状況	20
第17図 地山断面実測図	21
第18図 埴輪実測図	23
第19図 西方寺に残る石室使用石材	26
第20図 二子塚古墳の石室構築方法想定図	28

第21図	市尾墓山古墳石室下部の構造	29
第22図	二子塚古墳墳丘縦断面模式図	30
第23図	横穴式石室構築方法の2例	31

参考史料目次

一、『殿 曆』	—(40)
二、『台 記』	—(40)
三、『山城南勝志』	二(39)
四、『山城南勝志巡行志』	二(39)
五、『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊	三(38)
六、『山城国山科郷古図』	五(36)
七、『都名所図会』	六(35)
八、『明治27年1万分の1複製図』	七(34)

図 版 目 次

原色図版第 1	後円部残丘と基礎礫群(62—1 トレンチ)
原色図版第 2	(1) 62—1・63—1 トレンチ全景(南から) (2) 63—1 トレンチ全景(北から)
原色図版第 3	(1) 63—2 トレンチの裏込め土と基礎礫群(北から) (2) 63—2 トレンチ完掘状況(北から)
図版第 1	二子塚古墳航空写真(昭和57年)
図版第 2	(1) 宇治川と宇治東部(菟道小学校より北を望む) (2) 二子塚古墳遠景(明治天皇陵から南を望む)
図版第 3	(1) 二子塚古墳全景(南西から) (2) 二子塚古墳西側内堤(南から)
図版第 4	(1) 二子塚古墳東側の現状(南東から) (2) 二子塚古墳の石室に使われていた石材(西方寺本堂裏)
図版第 5	(1) 伝二子塚古墳出土鏡(四乳四獣形鏡) (2) 大正年間出土の埴輪(京都大学蔵)

- 図版第6 62-1 トレンチ全景(南から、昭和62年度調査)
- 図版第7 62-1 トレンチ基礎礫群(北から、昭和62年度調査)
- 図版第8 (1) 62-1 トレンチ基礎礫群検出状況と後円部残丘(北から、昭和62年度調査)
(2) 62-1 トレンチ基礎礫群掘方北端部(西から、昭和62年度調査)
- 図版第9 (1) 調査前の状況(東から)
(2) 同 上(西から)
- 図版第10 (1) 完掘状況(西から)
(2) 63-1・62-1 トレンチ完掘状況(南から)
- 図版第11 (1) 63-1 トレンチ調査風景
(2) 63-1 トレンチ表土除去状況(北から)
- 図版第12 (1) 63-1 トレンチと62-1 トレンチの関係(北から)
(2) 同 上 (南から)
- 図版第13 (1) 63-1 トレンチの基礎礫群・裏込め土・墳丘盛土(北から)
(2) 63-1 トレンチの基礎礫群(北から)
- 図版第14 (1) 63-1 トレンチの基礎礫群(南から)
(2) 63-1 トレンチの基礎礫群掘方の北西隅部(西から)
- 図版第15 (1) 62-1 トレンチ作業風景
(2) 63-2 トレンチ作業風景
- 図版第16 (1) 63-2 トレンチ表土除去状況(南から)
(2) 同 上 (北から)
- 図版第17 (1) 63-2 トレンチ攪乱土除去状況(南から)
(2) 同 上 (北から)
- 図版第18 (1) 63-2 トレンチの攪乱された礫群状況(南から)
(2) 同 上 (北から)
- 図版第19 (1) 63-2 トレンチ南部の攪乱された礫群状況(東から)
(2) 63-2 トレンチ北部の攪乱された礫群状況(北から)
- 図版第20 (1) 63-2 トレンチの基礎礫群と掘方(南から)
(2) 同 上 (東北から)
- 図版第21 (1) 63-2 トレンチ北部の基礎礫群上面検出状況(北から)
(2) 同 上 (東から)
- 図版第22 (1) 63-2 トレンチ掘方北東隅部の基礎礫群の断ち割り(東から)
(2) 同 上 (北から)

五ヶ庄二子塚古墳

1. はじめに

五ヶ庄二子塚古墳(以下、二子塚古墳という)は、宇治市五ヶ庄大林の西方寺境内に現存する大型の前方後円墳で、古墳時代後期のものとしては京都府下最大級の古墳である。

古墳は、現在、墳丘部分が竹藪となっており、墳丘の西・南側に周濠と堤の一部が遺存している。墳丘の北及び東側の周濠と堤部分については、工場や家屋そして京阪電鉄宇治線の鉄道敷があり、旧状をほとんど留めていない。墳丘についても、後円部が大正年間土取りにより破壊^{註1}されており、現在は前方部のみが往時の姿を留めている。昭和60年の夏、前方部南西側の堤外方^{註2}の調査で、本墳には現在に残る濠の外側に幅12m程のもう一重の濠、すなわち外濠がめぐらしい事が判明した。外濠は完全に埋没しており、現在は宅地や茶畑となっているが、西側では土地割りなどから、その範囲を概ね推定できる。

このように、二子塚古墳は、古墳時代後期の大型前方後円墳であるとともに、本格的な二重周濠を備える完備した古墳ではあるが、その具体的内容を確認するための調査は実施されてこなかった。近年、古墳周辺部分での開発が進むなかで、本市教育委員会は、本古墳の保護のため、早急にその具体的内容を把握する必要を認め、昭和62年度より継続的に本古墳の調査を実施することとなった。今年度は2年度目となる。

今年度の調査は、昨年度^{註3}の発掘調査で検出した後円部中央付近の礫群の範囲と性格を確認することを主目的に発掘調査を実施した。調査は、竹根に阻まれ、かなり厳しい状況の中で実施をしなければならなかったが、一応、当初の目的は達することができたと考えられる。

発掘調査の成果については後述をするが、後円部中央に存する礫群は、かつて存在した横穴式石室の基礎であり、その範囲は、東西約19m、南北9mにも及ぶ巨大なものであることが判明した。すでに消滅した石室の規模や開口方向について、この基礎部分の検出から一定の判断が可能になった点において、大変貴重な知見を得ることができた調査であったといえる。

また、発掘調査と合わせて本古墳と周辺部分の測量及び図化^{註4}を実施した。これは、従来の測量図が昭和46年の宇治市史編纂時のものであり、発掘調査で検出する遺構と墳丘図とが整合しないため、新たに周辺地形をも含めた測量図を作成し、本古墳の墳丘及び周辺地形と発掘調査成果とが統一的な測量点から計測できるようにしたものである。この測量成果については、次年度に報告をしたい。

今回の調査を実施するについては、土地所有者である西方寺をはじめ、西方寺総代各氏、または関係機関・各位より多くのご協力・ご指導を得た。記して感謝を申し上げる。

五ヶ庄二子塚古墳



1. 黄金塚古墳群
2. 赤塚古墳
3. 御蔵山古墳群
4. 木幡古墳群
5. 二子塚古墳
6. 寺界道遺跡
7. 宇治郡衙推定地
8. 瓦塚古墳
9. 岡本廃寺
10. 日皆田古墳群
11. 一里塚古墳
12. 隼上り瓦窯跡
13. 羽戸山遺跡
14. 隼上り古墳群
15. 隼上り遺跡
16. 大鳳寺跡
17. 二子山古墳
18. 平等院
19. 丸山古墳
20. 庵寺山古墳
21. 一本松古墳
22. 広野廃寺
23. 坊主山古墳
24. 金比羅山古墳
25. 芭蕉塚古墳
26. 青塚古墳
27. 梶塚古墳
28. 車塚古墳
29. 丸塚古墳
30. 箱塚古墳
31. 芝ヶ原古墳
32. 西山古墳群
33. 上大谷古墳群
34. 芝ヶ原古墳群
35. 尼塚古墳群
36. 平川廃寺
37. 正道官衙遺跡

第1図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の主要遺跡 (1:50000)

2. 位置と環境

(二子塚古墳の位置)

二子塚古墳の所在する五ヶ庄大林付近(岡屋)は、ゆるやかに西に向って低くなる沖積台地となっており、二子塚古墳付近の標高は21~28m程となっている。古墳の西400mには宇治川が北流し、北1kmあたりには山科盆地を南下してきた山科川が流れている。宇治地域の宇治川東岸部分を我々は宇治市東部と呼んでいるが、二子塚古墳の位置するところはその中でも北端部分にあたり、山科盆地と接する地域である。

宇治川の西側にはかつて巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖が存在していた。湖は昭和16年の干拓終了によって現在は水田と化した。二子塚古墳は、この巨椋池に主軸を平行にして築造されており、墳丘頂からは、今でもかつての巨椋池を通して対岸の向日丘陵・男山丘陵そして北摂津の山丘を望むことが可能である。

近くの遺跡には寺界道遺跡・宇治郡衙推定地・木幡古墳群がある。寺界道遺跡は二子塚古墳の南側に広がる縄文から平安時代に至る集落跡であり、昭和60年にその一部が調査されて^{註5}



第2図 五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形

五ヶ庄二子塚古墳

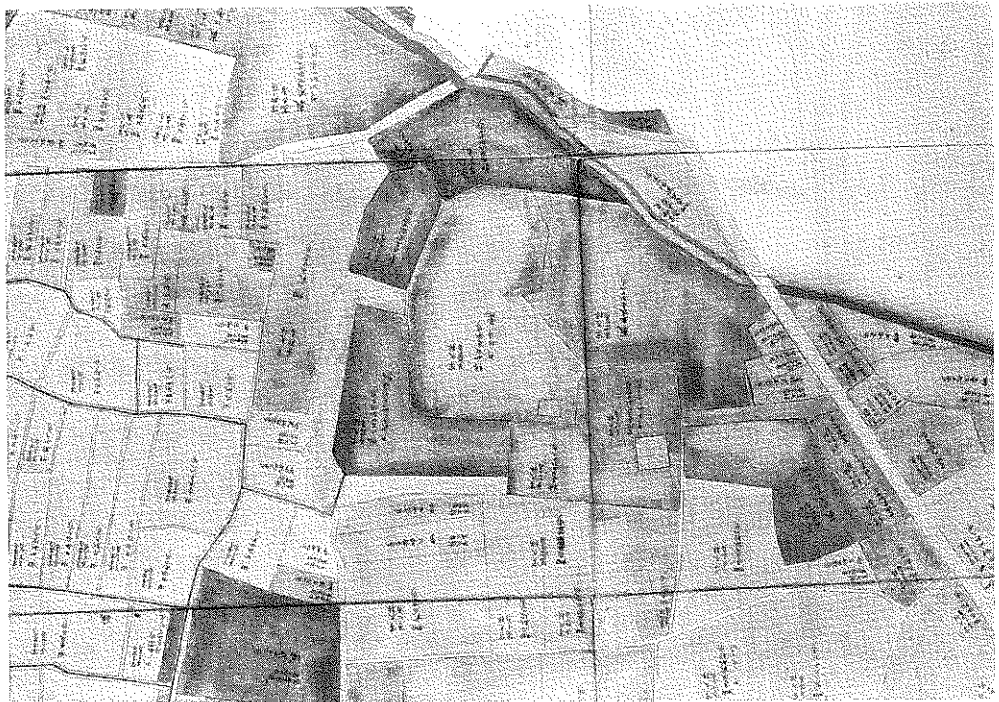
いる。宇治郡衙推定地は古地名からその存在が推測^{註6}されているところであり、土器片、古瓦片を採集できる。また、木幡古墳群は、二子塚古墳東方の丘陵上に密集する古墳群であり、現在120基程の円墳が宮内庁の宇治陵墓として管理されている。

(文献に登場する二子塚古墳)

二子塚古墳は、平安時代の貴族の日記の中にその名を散見することができる。まずは、藤原忠実が著した『殿暦』の康和5年(1103)7月24日条に「二子墓」と記され、次いで忠実の子藤原頼長が著した『台記』の久安6年(1150)9月26日条には「二子陵」と記されている。この両日記にでてくる「二子墓」なり「二子陵」は、文面よりこの二子塚古墳と同一のものと見てまちがいがなく、平安末期においてはこの古墳の存在が当時の貴族の間に知られていた事がわかる。また、江戸時代の宝暦4年(1754)に出版された『山城名跡巡行誌』の第6には「二子塚 在岡屋」とあり、現在我々が使用する二子塚の名称は概ね近世には確立していたと考えられる。このように、本墳は古くより著名な古墳であったことがわかる。

(明治の地籍図)

明治初年頃のものと思われる二子塚周辺の地籍図が現在宇治市に残されている。この地籍図には地割りと地目とが記されており、これより当時の二子塚古墳の状況を知ることができる。墳丘部分の地割りは概ね前方後円形となっており、地目は林とある。周濠は前方部前面及び



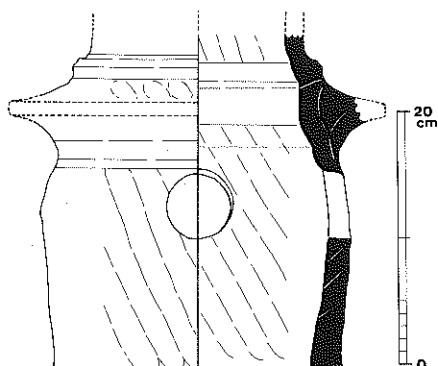
第3図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図(明治初年頃、上が北)

西側に「L」字形に描かれ、それを囲む堤が表現されている。後円部の西・北側にも竹藪として周濠・堤の痕跡を看取できる。また、周濠の西側には田・畑として長細い地割が認められ、これがおそらく外濠の痕跡を示していると思われる。このように、明治初年頃の二子塚古墳は墳丘がほぼ完存しており、周濠・堤・外濠の一部及び痕跡をかなり良好に残していたことが理解できる。なお、遺存する周濠・堤は現在の状況とほぼ等しいと思われ、周濠の大半の埋没は江戸時代以前であったことがわかる。

(大正年間の後円部破壊)

このように、比較的良好に遺存してきた二子塚古墳は、大正3・4年に後円部が土取りにより破壊され、大きくその形状をそこなうこととなった。この破壊の報に接し大正4年5月に現地におもむいた梅原未治はその状況を次のように報告している。「(後円部は)既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ、(中略)凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主体ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシ」。梅原が現地を調査した時点では、すでに後円部の大半は破壊され、主体部のものと思われる大石が数個残っているにすぎなかったらしい。しかし、現在では、梅原が主体部の一部と考えた大石もすでになく、彼の調査後、なお少しの土取りが行なわれた事が考えられる。

梅原は、このため後円部破壊時の状況を当時の西方寺住職より聞き取りしている。それによれば、「後圓中央ノ土砂ノ採掘に當リ、基底部近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造」であつたらしく、彼は本墳の主体部が横穴式石室らしいと考えた。ただ、この石室は「發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹」があつたらしく、完存ではなかった可能性を指摘している。このように、本墳の主体部が横穴式石室であつたらしいことは、今回の我々の聞き取り調査からも充分可能性の高いこととすることができる。子供時代に二子塚古墳の後円部土取りを実見した飯田武男氏(明治36年生)によれば、後円部を削った時に巨石を組みあげた構造物が発見されたということであり、東西方向に主軸をもつ横穴式石室がこの時露出した可能性は極めて高い。また、土取り以前では、ここにこのような石室があるのを全く知らなかったという事から推測すれば、石室は開口せず完全に封土中に埋もれていたと考えられる。また、竹中宏氏(昭和9年生)によれば、この



第4図 大正年間出土の埴輪

(京都大学蔵)

五ヶ庄二子塚古墳

土取りによって出土した巨石を西方寺本堂裏に運んだのを母の(故)竹中みつゑ(明治28年生)が実見したといい、現在、西方寺本堂裏の庭にある巨石(3.3×2.5m)がその石であるという。この石が石室のどの部分に使用された石材かはすでに確証を欠くが、形状から考えて天井石もしくは奥壁に使用されたものではないかと思われる。他の石がその後どのようなようになったかは不明である。

遺物については、石室内より全く出土しなかったといい、わずかにこの時採集された埴輪片(第4図)が現在京都大学に残されている。この埴輪は、形象埴輪の基部にあたり、その形状より人物埴輪の一部と考えられる。

(伝二子塚古墳出土鏡)

二子塚古墳より出土したと伝えられる鏡の写真が、昭和62年に京都府内を巡回展示した「鏡と古墳」展示図録^{註7}にのっている。この写真は、樋口隆康氏が多年にわたって収集した写真資料の一つで、現物は不明であるという。図録によれば、直径12cmの四乳四獣形鏡とあり、鏡周囲の錆化が著しい。仿製鏡である。

(宇治市史編纂に伴う墳丘測量)

昭和46年になって、宇治市史編纂に伴って二子塚古墳の測量調査が実施され、その成果が『宇治市史 第1巻』に報告されている。この測量が本墳にとっては初めてのものであり、本報告においてもその測量図を使用している。

市史ではこの測量成果を次のように報告している。「墳丘の全長は105mにおよび、前方部の幅は80mでかなり広がり、高さも11.5mと比較的高いことが判明した。後円部を図上で復元すると直径60m、残丘の高さは9.5mである。墳丘裾には段築が認められるが、墳丘のまわりには、



第5図 五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図

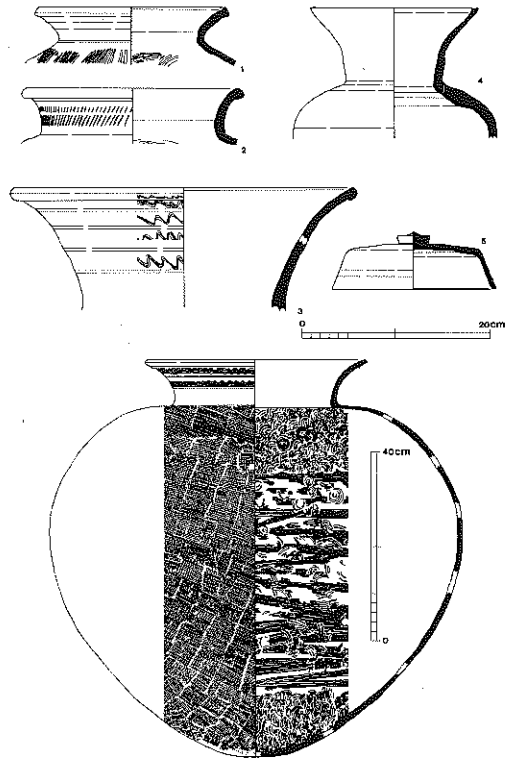
現在の南西角を中心に幅23mの濠が鍵形に残っている。この濠の幅の周滙は前方後円墳の墳丘をひとまわりしていたと推察される。また周滙の外側には幅14mの堤防がめぐらされている。この測量による墳丘等の各数値については、今後、二子塚古墳の調査が進展する中で変更されていき、より正確なものへと向わねばならないが、とにかくにも、測量調査によって本墳が100mを超える規模の大型前方後円墳である事を証明できたことは大きな成果であった。

(外濠の発見)

昭和60年の夏、外濠の発見により、本墳が2重周濠を備える古墳であることがわかった事は、前述した。この調査成果については、すでに本市教育委員会が「二子塚古墳外濠発掘調査概要^{註8}」として報告しているので詳細はこの報告にゆずり、ここではその成果を略記したい。

外濠を発掘調査で確認した地点は、現在残る堤の角の南側である。外濠は素掘りの幅約12m、深さ約1.5mの規模を測る。濠底には粘土層が認められ、一定時間、この外濠が滞水していた事が窺えた。濠内からは、須恵器・土師器・埴輪が出土し、これらの遺物より外濠が埋没したのは奈良から平安時代にかけての頃であることが推察された。

外濠の調査については、調査範囲が狭く、この濠がどの程度の広がりをもって古墳を取り巻くのかは、今後の調査をまたなければならないが、現在の地形からでも一定の推測は可能である。まず、前方部前面側であるが、これは外濠の発見地点が前方部前面側であるため、この部分には存在していると見てよい。地形より外濠の存在が予測できるのは、古墳の西側である。この部分は、明治の地籍図において堤にそって長細い地割が認められ、現在においてもその地割は道路・宅地として存在している。外濠部分にあたる場所は、現在家屋が建っているが、その前は水田であったといい、この水田は周囲より一段低かったという。この水田の東西長は約10mであったという。現状の中では、この地割りを外濠の名残りと見るのが最も可能性が高い。古墳の東側は西に比べ7m程も高く、この部分に外濠が存在するか否かは今後の解決すべき点の一つである。



第6図 外濠出土の須恵器

五ヶ庄二子塚古墳

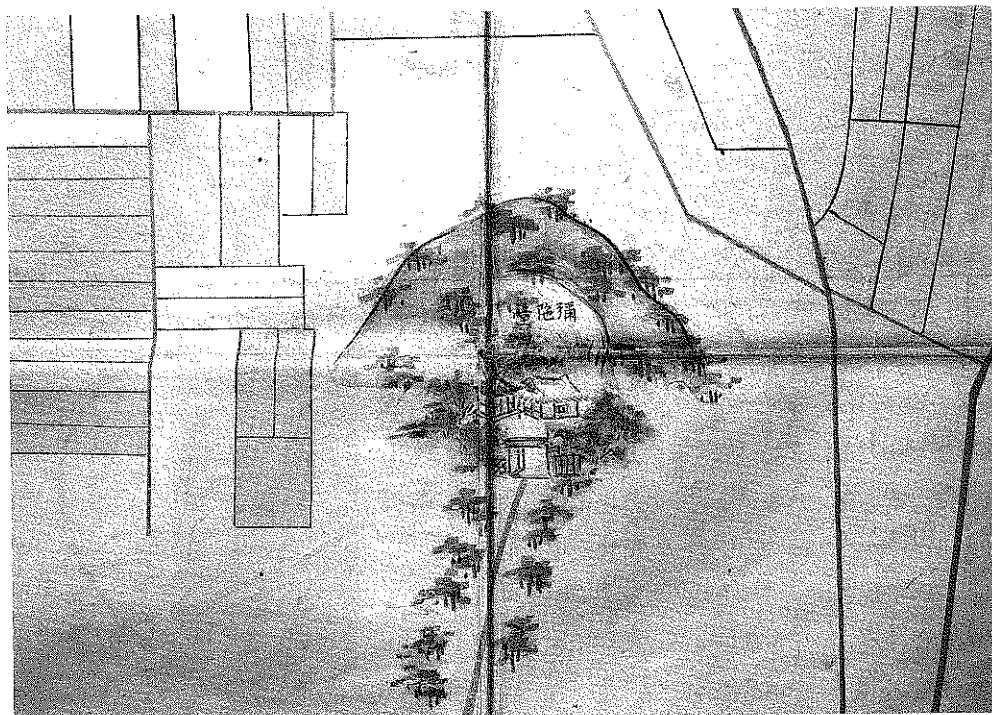
(西方寺)

西方寺は、現在、浄土宗に属するが、かつては天台宗の寺であったという。開基創立については確認されていない。当寺は、「弥陀次郎」とも呼ばれる。これは、『山城名勝志』や『都名所図会』などが記すように、当寺本尊の阿弥陀如来にかかる縁起である「弥陀次郎伝説」から、このように俗称されるようになったものである。万福寺が所蔵する「万福寺山内古図」においては、当寺は「弥陀堂」と記されている。

この阿弥陀如来を本尊として信仰を集めた西方寺は、近衛家から毎年回向料の寄進を受け、そのつながりは、終戦まで続いていた。本堂の裏には、関白近衛兼経墓と伝える墓石が建っている。

前述の「万福寺山内図」が記す西方寺裏には、小山が描かれている。おそらく、二子塚古墳の墳丘を描写したものである。地元では、古墳を「ダンノヤマ」、濠を「ダンノイケ」と通称しているという。

古墳の東側周濠が、いつ頃埋め立てられたかは、西方寺の創立と深くかかわっていると思われるが、現時点ではその時期を明確にできない。但し、諸文献や古図などより、江戸時代の前半には現在の位置に西方寺が営なまれていることはたしかであり、さらにどこまで遡り得るかについては、各方面からの検討が必要である。



第7図 「万福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳

3. 調査の経過

(昭和62年度の調査)

二子塚古墳の墳丘調査としては最初のものである昨年度の発掘調査は、大正年間に破壊された後円部の残存状況の確認を目的としたものであって、その成果はすでに報告したように、後円部東側の墳丘斜面と、後円部中央部に礫群を発見するものであった。前者は、おそらく後円部の第2段目の墳丘斜面に相当するものと思われ、葺石の遺存が部分的に確認された。後者は、墳丘のほぼ中軸にそって南北に設定したトレンチで、その一部を確認したものであったが、状況的にはかつて存在した石室に関する施設の可能性を窺わせるものであった。昨年度の報告では、この施設に基礎礫群という名称を与え、石室の基礎地業の可能性を指摘したが、その範囲、具体的な構造については次回の調査に期すこととなったのである。

(本年度の調査経過)

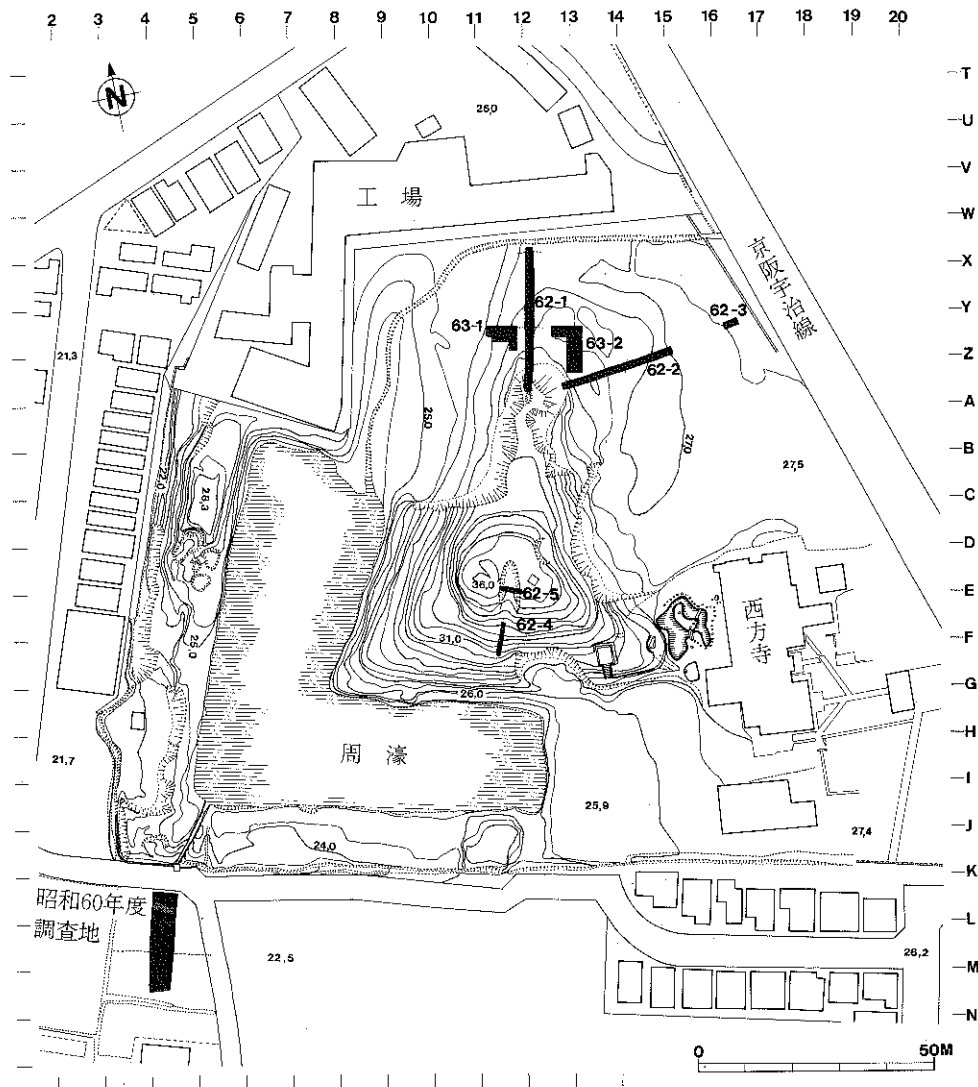
本年度の調査は、昨年、図らずも検出することができた後円部中央部の施設が、はたして石室の基礎であるか否か、また、その規模等についてはどうなのかについて、具体的資料を得ることを主目的として、発掘調査を実施することとなった。

調査は、まず、昨年礫群を発見したトレンチ(62-1トレンチ)の西側と東側とに試掘トレンチを設定し、礫群の掘方北辺をそれぞれ東方・西方へと追求することから始めた。西側に設定したトレンチを63-1トレンチ、東側のものを63-2トレンチとする。また、62-1トレンチについては、礫群部分を再び掘りなおした。トレンチの呼称は、頭に調査年度を用い、後にトレンチ番号を表わすこととした。

63-1トレンチは、当初、南北2m、東西7mに設定をし、表土を除去したところ、盛土を掘り込んだ基礎礫群掘方の北辺と北西角部を発見できたので、南に拡張を行い、礫群の遺存状況の確認に努めた。礫群は、62-1トレンチに近い、東半部で比較的良好に遺存していたものの、西半部では、後世の礫の抜き取りにより遺存状況が悪く、掘方を検出するに留まった。

63-2トレンチも、当初は63-1トレンチと同様、基礎礫群の掘方を求め東西トレンチを設定し表土を除去した。トレンチ東端部で掘方北東部を発見したため、この部分でトレンチを南に8m程拡張を行い、掘方東南隅部の検出に努めた。本トレンチによる基礎礫群の遺存状況は、62-1トレンチと比べると悪く、大正年間の後円部破壊時に礫そのものもかなりの量が抜き取られたと考えられる。また、トレンチ中央部付近に後円部削平後に築かれた野井戸を検出した。野井戸については、調査に伴う掘削を行わないとしたため、最終的には土

五ヶ庄二子塚古墳



第8図 昭和62・63年度トレンチ配置図(昭和46年測量図を調整)

柱状に残ることとなった。調査の終盤で、掘方北東部の礫群を底面まで掘り抜く作業を行い、底面の構造を窺うこととした。

調査が概ね終了に近づいた、平成元年1月28日(土)に市民対象の現地説明会を実施した。寒風ふく寒い日ではあったが、100名を超える市民参加をえた。

その後、実測作業や補足作業を行い、調査地を埋め戻すこととした。埋め戻しにあたっては、礫群には土のうで直接土が当たらないように保護を行い、調査で掘削した土で埋め戻しを行い現地調査を終了した。